

大塚遺跡7

—第19・20・21・22次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1223集

2014

福岡市教育委員会

O O TSUKA I SEKI
大 塚 遺 跡 7

—第19・20・21・22次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1223集



遺跡略号	調査番号
OTS-19	1202
OTS-20	1216
OTS-21	1218
OTS-22	1219

2014

福岡市教育委員会



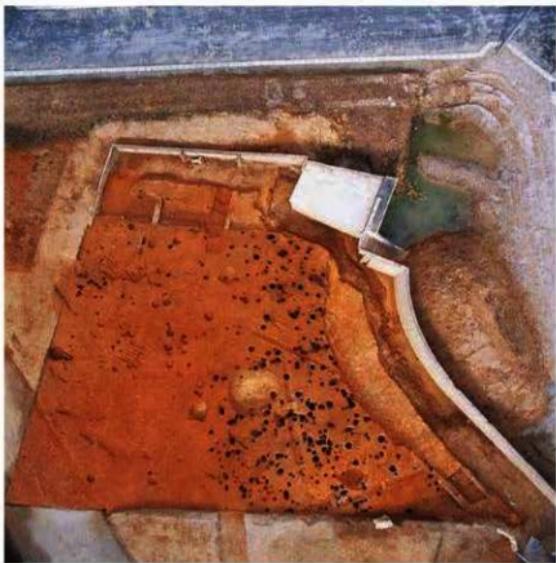
大塚遺跡周辺調査区航空写真

*デジタル合成写真

*上が北

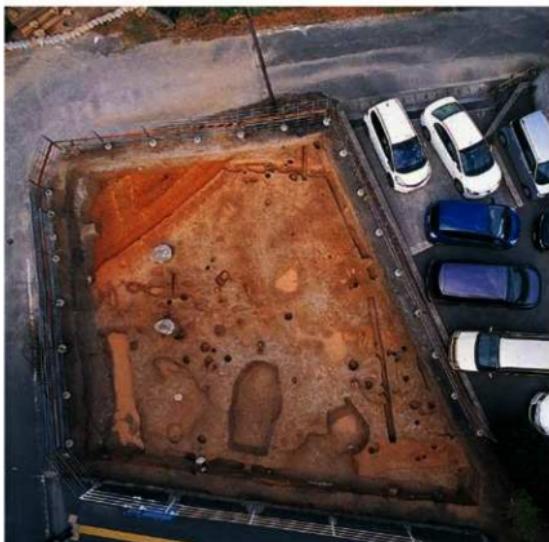


(1) 第20次調査区全景（南東上空から）



(2) 第22次調査区全景（上空から）

* 上が北



(1) 第21次調査区全景（上空から）

* 上が北



(2) 第21次調査出土青銅製勾玉

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私どもの責務あります。また、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市」像を目標のひとつとしてまちづくりを行っています。

しかし、近年の都市開発によって地下に埋もれた貴重な先人の足跡が失われていくこともあります。そのため、本市教育委員会では事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存によって後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、本市の伊都土地区画整理事業に伴い調査を実施した大塚遺跡第19・20・21・22次の各調査の成果を報告するものです。今回の調査では、主に戦国期の屋敷跡を確認すると共に、当時の生活用具が出土しました。これらは、当時の大塚地区の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、本市住宅都市局伊都区画整理事務所をはじめとする数多くの関係者のご理解とご協力を賜りました。ここに心から謝意を表します。

平成26年3月24日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例 言

- 本書は、福岡市教育委員会が伊都土地区画整理事業に伴い、福岡市西区今宿町地内において発掘調査を実施した大塚遺跡第19・20・21・22次調査の報告書である。
- 発掘調査および整理・報告書作成は、本市の令達事業として実施した。
- 報告する各調査の基本情報は、下表のとおりである。
- 本書に掲載した遺構実測図の作成は、調査担当者である榎本義嗣・福菌美由紀・清金良太の他、朝岡俊也（福岡大学院生）・太田智（福岡大学学生）・辻節子・梅野真澄が行った。
- 本書に掲載した遺物実測図の作成は、調査担当者の他、米倉法子が行った。
- 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、調査担当者が行い、空中写真撮影およびデジタルモザイク合成は、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
- 本書に掲載した挿図の製図は、調査担当者の他米倉が行った。
- 本書に掲載した国土座標値は、日本測地系（第II座標系）によるものである。
- 本書で用いた方位は座標北で、真北より $0^{\circ} 18'$ 西偏する。
- 遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、土坑をSK、溝をSD、石室をSR、ピットをSP、包含層をSXと略号化した。
- 遺物番号は各調査での通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
- 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 本書の執筆は、榎本・福菌・清金が行い、担当箇所は本文目次に掲載した。
- 付編として近接する大塚古墳探集遺物の報告を掲載した。
- 本書の編集は、福菌・清金の協力を得て、榎本が行った。

遺跡名	大塚遺跡	調査次数	第19次	遺跡略号	OTS-19
調査番号	1202	分布地図図幅名	今宿112	遺跡登録番号	020625
申請面積	1,304,000.0m ²	調査対象面積	722.0m ²	調査面積	676.2m ²
調査地	福岡市西区今宿町304-1、306-2、316-3、317、318-1			事前審査番号	13-1-233
調査期間	平成24(2012)年4月4日～4月10日、6月11日～8月30日				

遺跡名	大塚遺跡	調査次数	第20次	遺跡略号	OTS-20
調査番号	1216	分布地図図幅名	今宿112	遺跡登録番号	020625
申請面積	1,304,000.0m ²	調査対象面積	672.0m ²	調査面積	618.0m ²
調査地	福岡市西区今宿町308-1、309、310-1			事前審査番号	13-1-233
調査期間	平成24(2012)年8月6日～10月31日				

遺跡名	大塚遺跡	調査次数	第21次	遺跡略号	OTS-21
調査番号	1218	分布地図図幅名	今宿112	遺跡登録番号	020625
申請面積	1,304,000.0m ²	調査対象面積	250.0m ²	調査面積	175.0m ²
調査地	福岡市西区今宿町273-1、273-4、274-1			事前審査番号	13-1-233
調査期間	平成24(2012)年9月3日～10月25日				

遺跡名	大塚遺跡	調査次数	第22次	遺跡略号	OTS-22
調査番号	1219	分布地図図幅名	今宿112	遺跡登録番号	020625
申請面積	1,304,000.0m ²	調査対象面積	600.0m ²	調査面積	580.2m ²
調査地	福岡市西区今宿町333-2、334-3、334-5、334-6、334-7			事前審査番号	13-1-233
調査期間	平成24(2012)年9月5日～9月28日、11月5日～12月17日				

本文目次

I.	はじめに（梗概）	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II.	遺跡の立地と環境（清金）	2
III.	第19次調査の記録（梗概）	7
1.	概要	7
2.	遺構と遺物	7
1)	掘立柱建物（SB）	9
2)	土坑（SK）	11
3)	溝（SD）	11
4)	その他の遺物	18
3.	結語	18
IV.	第20次調査の記録（福蔭）	19
1.	概要	19
2.	遺構と遺物	19
1)	掘立柱建物（SB）	21
2)	柵列（SA）	21
3)	土坑（SK）	21
4)	溝（SD）	21
5)	石室（SR）	28
6)	その他の遺物	28
3.	結語	29
V.	第21次調査の記録（清金）	31
1.	概要	31
2.	遺構と遺物	31
1)	堅穴住居（SC）	31
2)	土坑（SK）	33
3)	溝（SD）	33
4)	その他の遺物	33
3.	結語	36
VI.	第22次調査の記録（梗概）	38
1.	概要	38
2.	遺構と遺物	38
1)	掘立柱建物（SB）	39
2)	土坑（SK）	42
3)	溝（SD）	43
4)	その他の遺物	45
付編	大塚古墳出土の埴輪について（清金）	46

挿図目次

第1図 大塚遺跡位置図 (1/25,000)	3
第2図 伊都土地区画整理事業地内調査区位置図 (1/10,000)	4
第3図 各調査区位置図 (1/1,500)	6
第4図 第19次調査区南壁面土層実測図 (1/60)	8
第5図 第19次調査区全体図 (1/200)	(折り込み)
第6図 SB018実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)	9
第7図 SB019実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3、1/4)	10
第8図 SK013・014・015実測図 (1/40) およびSK014・015出土遺物実測図 (1/1、1/3、1/4)	12
第9図 SD001・002・003・004・005・006・007・009・010・016・017実測図 (1/40)	13
第10図 SD002・003・004・005・007出土遺物実測図 (1/3、1/4)	14
第11図 SD009・010・011・016出土遺物実測図 (1/3、1/4)	16
第12図 ピットおよび遺構検出時出土遺物実測図 (1/1、1/3、1/4)	17
第13図 第20次調査区全体図 (1/200)	20
第14図 SB081・082実測図 (1/60)	22
第15図 SB091・SA093実測図 (1/60)	23
第16図 SK036・038・039実測図 (1/40) およびSK038出土遺物実測図 (1/1)	25
第17図 SD001・002土層断面実測図 (1/40) およびSD002出土遺物実測図 (1/3)	26
第18図 SR037実測図 (1/30) およびSR037・その他の出土遺物実測図 (1/1、1/3)	27
第19図 第21次調査区全体図 (1/100)	32
第20図 第21次調査区東壁面土層実測図 (1/50)	33
第21図 SC008・SK034・SD033実測図 (1/40、1/60) および出土遺物実測図 (1/1、1/3)	34
第22図 SX001・ピット出土遺物実測図 (1/1、1/3)	35
第23図 青銅製勾玉集成図 (1/1)	37
第24図 第22次調査区全体図 (1/200)	(折り込み)
第25図 第22次調査区南壁面土層実測図 (1/60)	39
第26図 SB006実測図 (1/60)	40
第27図 SB007・009・010実測図 (1/60) およびSB007出土遺物実測図 (1/3)	41
第28図 SB008実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/3)	42
第29図 SK003・005実測図 (1/40、1/60) およびSK003出土遺物実測図 (1/3)	43
第30図 SD001・002・004・011実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3、1/4)	44
第31図 ピットおよび遺構検出時出土遺物実測図 (1/2、1/3)	45
第32図 大塚古墳円筒埴輪出土位置図 (1/1,500)	46
第33図 大塚古墳出土円筒埴輪実測図 (1/4)	46

図版目次

- 卷頭図版 1 大塚遺跡周辺調査区航空写真
- 卷頭図版 2 (1) 第20次調査区全景(南東上空から) (2) 第22次調査区全景(上空から)
- 卷頭図版 3 (1) 第21次調査区全景(上空から) (2) 第21次調査出土青銅製勾玉
- 図 版 1 (1) 第19次調査区全景(1)(西から) (2) 第19次調査区全景(2)(西から)
- 図 版 2 (1) SB018(東から) (2) SB019(北から)
(3) SK013(北東から) (4) SK013土層(北西から)
(5) SK014(北から) (6) SK015(東から)
- 図 版 3 (1) SK015土層(南から) (2) SD001(北西から)
(3) SD001 a - a' 土層(北西から) (4) SD002(北西から)
(5) SD002 b - b' 土層(北から) (6) SD003 c - c' 土層(北から)
- 図 版 4 (1) SD004(東から) (2) SD004 d - d' 土層(北東から)
(3) SD005・006(南西から) (4) SD005・006 e - e' 土層(北から)
(5) SD007 g - g' 土層(東から) (6) SD009・010(東から)
- 図 版 5 (1) SD009・010 j - j' 土層(西から) (2) SD009 h - h' 土層(東から)
(3) SD010 m - m' 土層(東から) (4) SD016(東から)
(5) SD016 n - n' 土層(東から) (6) SD017 p - p' 土層(北から)
- 図 版 6 第19次調査出土遺物
- 図 版 7 第20次調査区全景(上空から)
- 図 版 8 (1) SB082(北から) (2) SK036(南から)
(3) SK038(東から) (4) SD001・002(南から)
(5) SR037(西から) (6) 第20次調査出土遺物
- 図 版 9 (1) 第21次調査区全景(上空から) (2) 第21次調査区東壁面北半部土層(西から)
(3) 第21次調査区東壁面南半部土層(西から)
- 図 版 10 (1) SC008(北から) (2) SC008土層(西から)
(3) SC008出土高坏(南から) (4) SC008出土碗(南から)
(5) SK034(西から) (6) SK034土層(西から)
- 図 版 11 (1) SD033(西から) (2) SD033土層(西から)
(3) SX001勾玉出土状況(1)(北から) (4) SX001勾玉出土状況(2)(南から)
(5) SX001勾玉出土状況(3)(北から)
- 図 版 12 第21次調査出土遺物
- 図 版 13 (1) 第22次調査区全景(1)(上空から) (2) 第22次調査区全景(南上空から)
- 図 版 14 (1) SB006(南から) (2) SB007(西から)
(3) SB008(南から) (4) SB009(西から)
(5) SB010(西から) (6) SK003(北から)
- 図 版 15 (1) SK005(南東から) (2) SD001(西から)
(3) SD002 c - c' 土層(西から) (4) SD004(西から)
(5) SD004 d - d' 土層(東から) (6) SD011(南東から)
- 図 版 16 第22次調査出土遺物

表 目 次

第1表 伊都土地区画整理事業地内調査一覧表	5
第2表 掘立柱建物計測表	24
第3表 SR037出土遺物計測表	27
第4表 青銅製勾玉一覧表	37

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成8(1996)年11月8日付、伊区第8号にて福岡市都市整備局(現 住宅都市局)伊都区画整理事務所計画課長より同市教育委員会文化財部埋蔵文化財課長宛に西区今宿町、大字女原、大字徳永地内における「福岡都市計画事業 伊都土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財事前審査についての依頼がなされた。同事業は、本市西部の新たな拠点として位置付けられている同地域130.4haを対象に都市基盤や交通結節機能の整備、良好な住宅地の供給を目的として計画的な市街地整備を推進するもので、平成8年10月14日に都市計画決定(平成13年10月5日に都市計画変更)、平成9年9月18日に事業計画決定(平成23年7月21日に事業計画変更)がなされた。また、事業の施工は平成9年度に始まり、同26年度に終了予定である。

この依頼を受けて同課では、事業地内の南側丘陵部には今宿五郎江遺跡や大塚遺跡等の複数の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することや広範な地内に未周知の包蔵地が存在する可能性があること等から事業地全域での試掘調査が必要であると判断し、平成8年12月から翌平成9年3月に収穫の終了した田畠を主な対象地として計68箇所でトレチによる試掘調査を実施した。

その結果、事業地北側の砂丘後背地では埋蔵文化財は確認できなかったが、從来の包蔵地範囲である南側丘陵部や丘陵間の谷部冲積地で埋蔵文化財の分布を確認できた。なお、この試掘調査の対象が事業地の約2/3のうち宅地等を除いた田畠であったことから、今回の対象範囲外や埋蔵文化財分布確認地域での詳細な範囲については、事業者による用地交渉や建物移転等の状況を把握しながら、隨時試掘調査を追加実施し、確認を進めていくこととなった。この試掘は本調査と併行しながら、平成24年7月まで継続した。また、事業者との協議の結果、事業地内で埋蔵文化財が確認された場合、道路や水路等の構造物設置箇所に加え、換地後の地権者の不公平を解消するため宅地部分についても造成のあり方を問わず記録保存のための本調査を実施することとなった。なお、同事業関係の埋蔵文化財本調査は平成14年12月の今宿五郎江遺跡第8次調査にて開始し、平成24年12月の大塚遺跡第22次調査をもって完了した。

今回報告する大塚遺跡第19・20・21次調査は、順に平成23年8月19日、同24年4月12・13日、同24年7月23日に実施した試掘調査、また、第22次調査については隣接する第7・16・17次調査の成果を受けて、本調査を要するとの判断したもので、条件の整った第19次から順次調査に着手した。

なお、発掘調査は、組織改編のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した文化財部埋蔵文化財調査課が同24年度に、また整理・報告書作成は、25年度に実施し、これらにかかる費用は事業主体である住宅都市局が負担した。

2. 調査の組織

調査委託：福岡市住宅都市局 伊都区画整理事務所

調査主体：福岡市教育委員会

(発掘調査：平成24年度、整理・報告書作成：平成25年度)

調査総括：経済観光文化局 文化財部 埋蔵文化財調査課 課長 宮井善朗

調査第2係長 菅波正人(24年度)

榎本義嗣(25年度)

調査庶務：同局 同部

埋蔵文化財審査課 課長 米倉秀紀

管理係長 和田安之

管理係 古賀とも子(24年度)

川村啓子(25年度)

事前審査：埋蔵文化財審査課

課長 米倉秀紀

事前審査係長 加藤良彦

主任文化財主事 佐藤一郎

事前審査係 今井隆博(24年度)

松尾奈緒子(25年度)

調査担当：埋蔵文化財調査課

主任文化財主事 榎本義嗣(第19・22次)

文化財主事 福蘭美由紀(第20次)

文化財主事 清金良太(第21次)

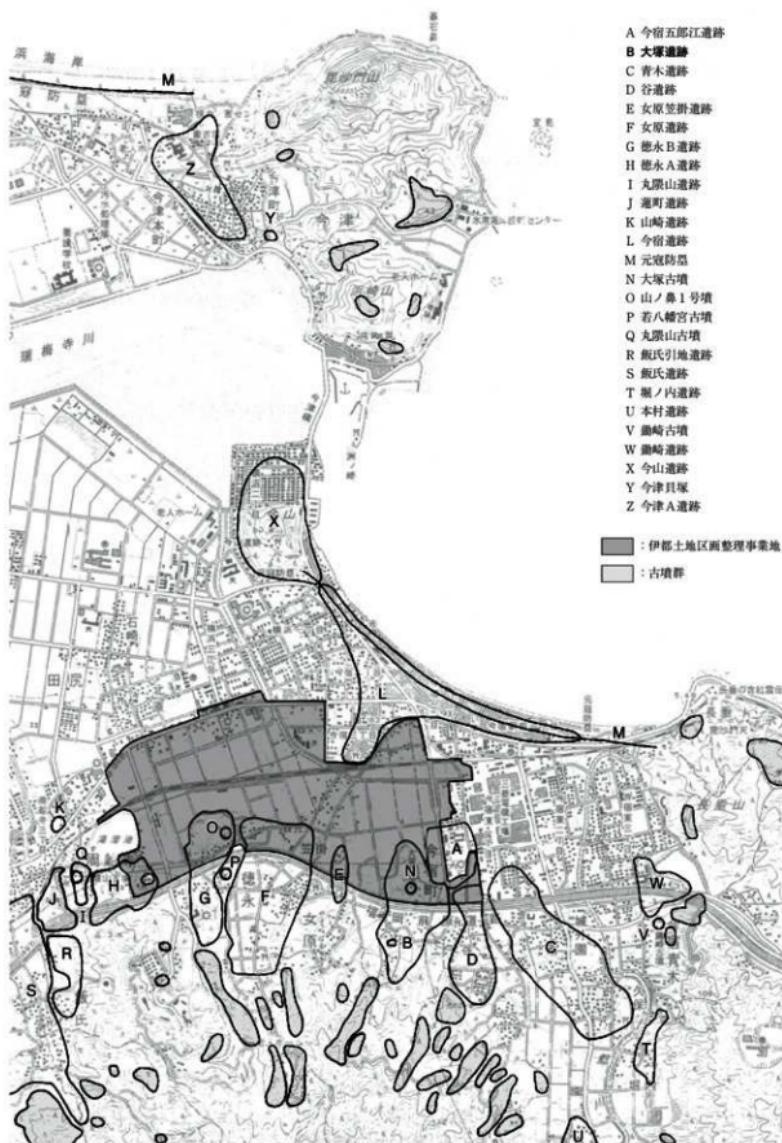
整理作業：大淵悦子 木本恵利子 久高教子 雨田慧 萩本恵子 松尾真澄

II. 遺跡の立地と環境

玄界灘に北面し、背後に背振・三郡山系をひかえる福岡市には、これらより派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開しており、東側から柏屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。今回報告する大塚遺跡は、このうち西部の今宿平野に位置する。東西約3km、南北約2kmの同平野の南側には高祖山の山塊がひかれ、東側には背振山系から北側に派生する叶岳・長垂山塊が延びて、東側の早良平野と画される。また、北側は今津湾に沿って長垂山の西側から今山の南東部に砂丘が弧状に発達する。その南側の後背地はかつて羅梅寺川河口に湧入する内海の東側にあたり、潟湖が拡がっていた。この平野の東部には高祖山と叶岳の間に扇状地形が発達し、その中央部を鯨川が北流する。また、西部は潟湖に面して高祖山山麓から北側に向かって低丘陵が八手状に派生し、丘陵間には狄隘な谷が開析する。なお、平野北側から北西側に拡がっていた内海や潟湖は沖積地化と近世の干拓事業によって水田化が進められてきた。

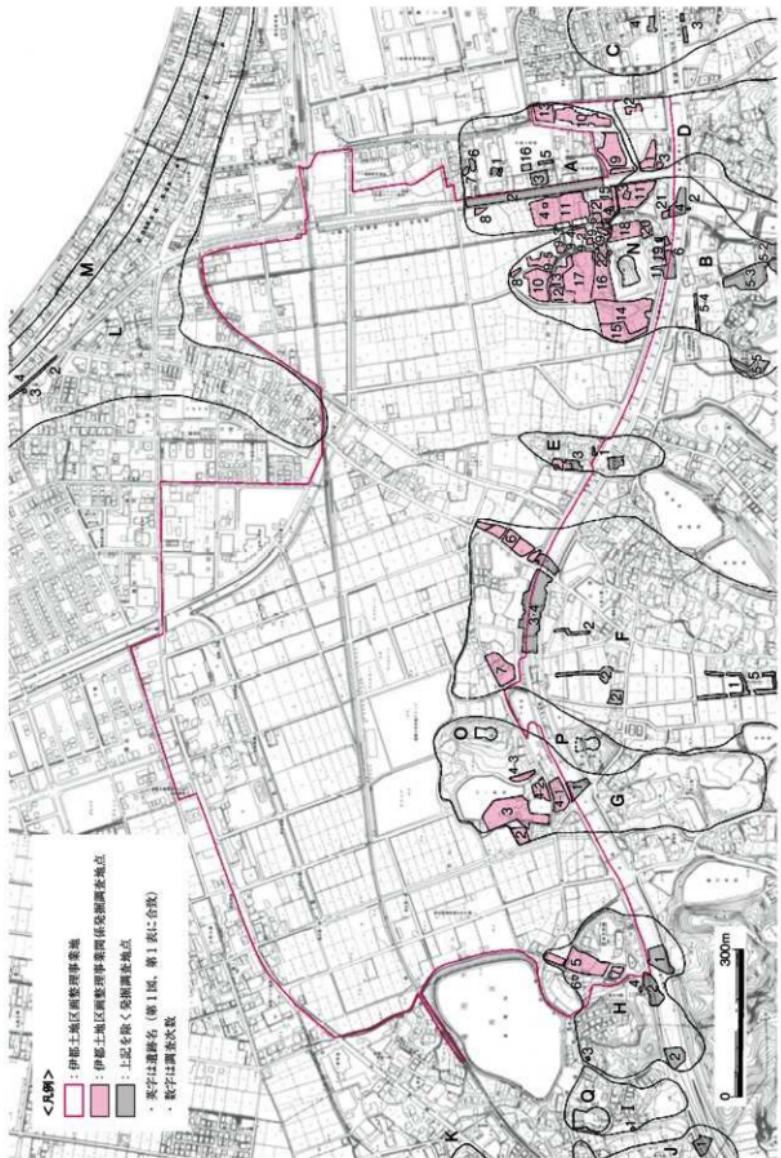
今回の調査要因である伊都土地区画整理事業の範囲は、平野の中央部から西側に位置し、北部の大半は潟湖であった砂丘後背地を多く含むものの、南側は高祖山山麓の丘陵と谷部を占める。後者では事業地の東から谷遺跡、今宿五郎江遺跡、今回報告の大塚遺跡、女原笠掛遺跡、女原遺跡、徳永B遺跡、徳永A遺跡の各遺跡が主に丘陵上に展開する。また、この丘陵端部付近には、「今宿古墳群」として国史跡に指定されている前方後円墳が占地し、西側の徳永B遺跡の北東丘陵端部には若八幡宮古墳に次ぐ首長系譜にある山ノ鼻1号墳が、東側の大塚遺跡の丘陵頂部には6世紀初頭から前半に築造された大塚古墳が所在する（第2図）。また、第1表のとおり、これら事業地内では平成14（2002）年度から平成24（2012）年度にかけて同事業関係の発掘調査を7遺跡35地点で実施し、その面積は約67,000m²におよぶ。詳細は刊行の進む各報告書に掲られたいが、ここでは、今回報告する大塚遺跡を中心に、隣接する今宿五郎江遺跡や谷遺跡等を含めて、調査成果を概観しておきたい（第3図）。

大塚遺跡は、砂丘後背地に向かって北側に延びる低位段丘に位置する。北側は潟湖に面し、東側は不安定な微高地に位置する今宿五郎江遺跡、谷遺跡と対峙する。西側は複数の谷が北側から入り込み、本遺跡東側と今宿五郎江遺跡との間には、大塚遺跡第9・18次調査で確認されている比較的大きな谷部が開析する。弥生時代前期以降、青木遺跡では集落形成が始まり、谷遺跡では弥生時代前期の水田も発見されている。その後、今宿五郎江遺跡第9次～13次、15次調査、大塚遺跡第11次調査では弥生時代中期後半から後期にかけての環濠集落が見つかっている。環濠の埋没が進む終末期以降集落域の拡大がみられる。大塚遺跡の集落形成は弥生時代終末期前後であり第4・16・22次調査では当該期の遺構が検出されている。今宿平野内で小規模な集落が増加する古墳時代中期前半には、大塚遺跡内でも同様であり、第14次・15次の集落域では朝鮮半島系土器の出土が多く、渡来人の居住が想定される。今宿平野周辺の丘陵では、古墳時代前期中葉から後期の前方後円墳や円墳など、400基以上の古墳が分布する。大塚古墳は64mの前方後円墳で後期前半の首長墓であるが、大塚古墳周辺には当該期の集落がみられない。奈良時代前後では大塚遺跡第14次調査などで製鉄関連の遺跡が多く見つかっている。平安時代末では大塚遺跡第10次・12・13次調査で建物主軸が南北に揃う掘立柱建物群などが見つかっており、墾田開発に伴う集落とされ、皇室領莊園として有名な怡土莊（史料初見1131年）との関係も想定される。鎌倉時代～室町時代では、大塚遺跡南部の5次調査で当該期の「居館」跡が見つかっている。戦国時代は大塚遺跡の盛期の一つであり大塚遺跡第17次、19次、20次調査では、丘陵尾根上に屋敷群が面的に展開しており、当該期の造成がほとんどそのまま現況の地形につながっているようである。

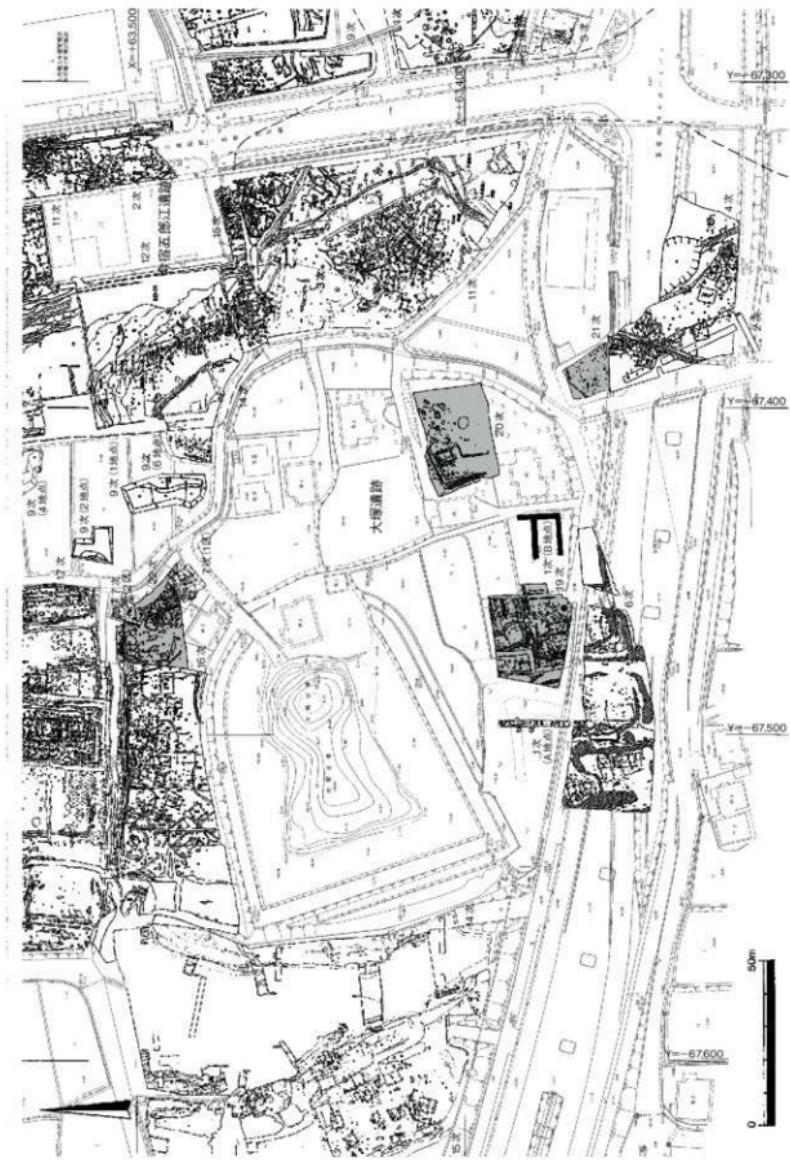


第1図 大塚遺跡位置図 (1/25,000)

第2図 伊都地区面整理事業地内調査区位置図 (1/10,000)



第3图 各调查区位置图 (1/1,500)



III. 第19次調査の記録

1. 概要

ここで報告する大塚遺跡第19次調査区は、西区今宿町304-1、306-2、316-3、317、318-1に所在する。調査前の現況は、標高約15.0mを測る家屋解体後の平地で、西端部では約1m程度低い荒地となる。調査地点は、遺跡の中央や北側に位置し、南側隣接地では、国道202号線今宿バイパスの建設工事に先立ち第6次調査が実施されている。また、北側約30mには6世紀前半代の墳丘全長約64mを測る前方後円墳、大塚古墳（国史跡 今宿古墳群）が占地し、周辺では区画整理事業に伴う多くの調査が行われている（第2・3図）。

「II. 遺跡の立地と環境」でも触れたように本遺跡は、北側に舌状に延びる低位段丘を主体に立地し、本調査区もその丘陵上にある。調査区の土層（第4図）は、上層部の大半が真砂土による宅地造成時の客土（1層群）で覆われ、東側の大半にはその下層に近世と推定される2・3層が遺構面上に堆積する。また、段落ちする西側には、削平により両層は認められず、造成前の旧水田層である4・5層が確認できた。よってこの段落ちは、水田耕作地造成のための切り土と想定され、当該地では遺構密度が希薄である。また、遺構面は東側から西側に向かって低くなる。

遺構面は南東端が最も高く標高約14.4m、北西端部が最も低くなり、12.5mを測る。調査区東端部の北側延長上には大塚古墳の後円部があり、丘陵の尾根線に相当する。なお、同古墳の基底面は丘陵の傾斜に沿うように後円部が高く、西側の前方部が低い。以上から、本調査区の大半は、段丘の西側緩斜面に立地し、東端部は尾根線に近い。また、遺構面は段丘の基盤である花崗岩風化礫層で、削平のおよぶ尾根線近くの調査区東側や西側の段落ち部では赤橙色を呈し、比較的削平の少ない調査区中央部の緩斜面では、従来その上層に堆積していたと考えられるやや粘性のある黄橙色土である。

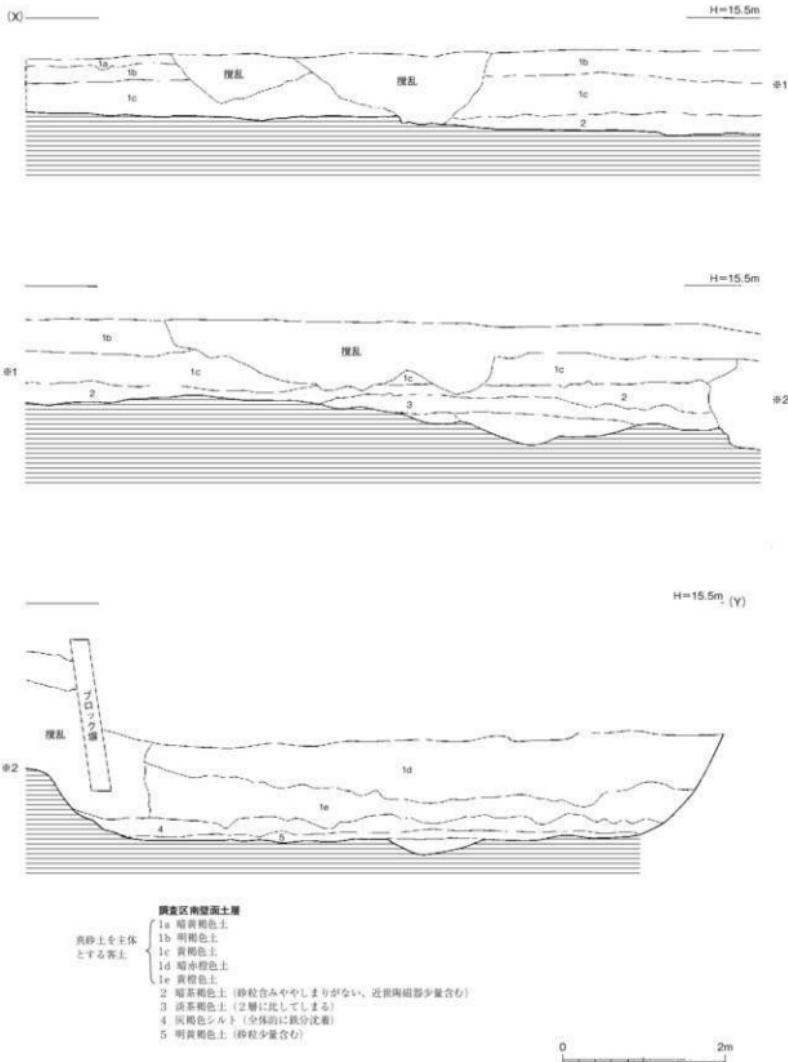
遺構検出は上述の遺構面上までを重機で剥ぎ取って実施し、調査の結果、中世後半期の掘立柱建物や土坑、溝、ピット等を確認できた。出土遺物量は、コンテナケースにして8箱で、多くは細片であった。

発掘調査は、平成24（2012）年4月4日に着手した。まず、重機による表土剥ぎ取りから開始し、進捗状況に合わせながら、調査区壁面や遺構面の養生を行った。一旦重機による作業や養生は、4月10日に終了したが、その後、事業地内の試掘調査や別地点の継続中の本調査を優先して行ったため、2ヶ月程度の中止期間を経て、6月11日より本格的な調査を再開した。まず、日本測地系によるトラバース杭の設定を実施し、調査区西側より遺構検出を開始した。順次、検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了した8月22日に高所作業車による全体写真的撮影を行った。なお、この間に区画整理の工事の関係上、調査事務所の移転を実施した。その後、残る図化作業や個別遺構写真撮影、片付け等を終え、8月30日に第19次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、722.0m²であったが、調査区周辺の安全対策上、実際の調査面積は676.2m²であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。

2. 遺構と遺物

以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における日本測地系による10m単位の平面座標を基準とした英字（西から東にA～D）と数字（北から南に



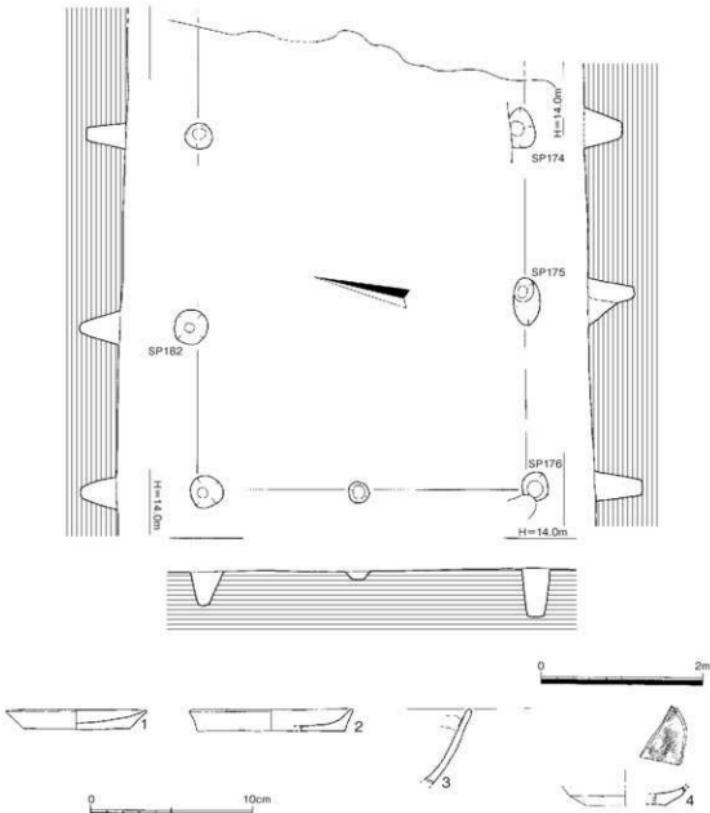
第4図 第19次調査区南壁面土層実測図 (1/60)

1～4) の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第5図参照）。

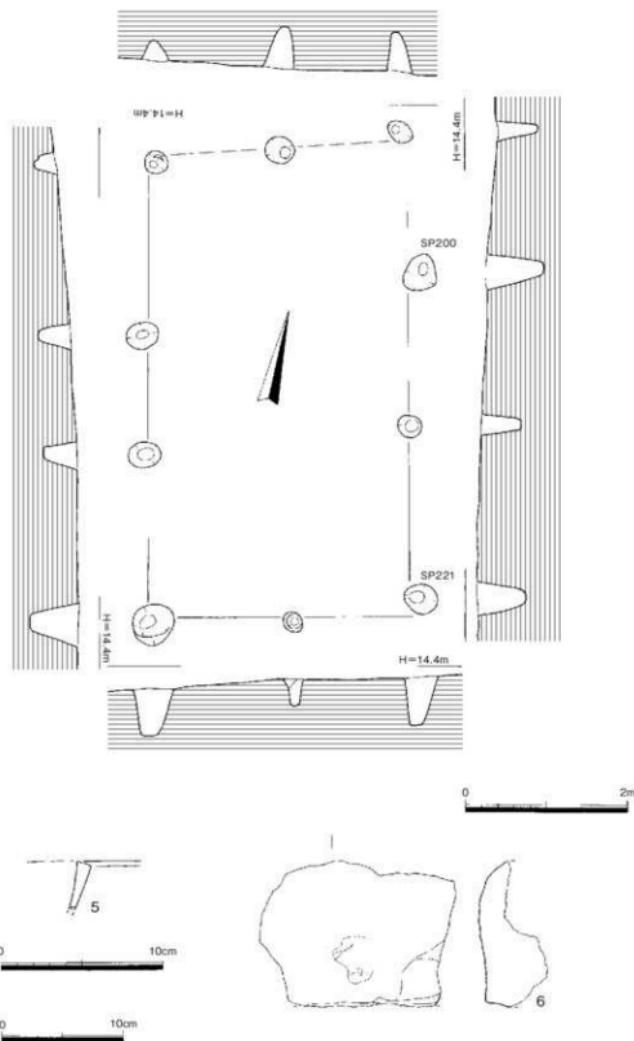
1) 掘立柱建物 (SB)

以下、調査時に抽出した2棟の掘立柱建物を報告する。SB019周辺のピット群は、他に建物としてのまとまりがあるように見受けられたが、復元には至らなかった。なお、建物主軸方位は座標北からの偏差である。

SB018 (第6図) 調査区北東のC・D-1・2に位置する 2×3 間以上の東西棟の建物で、東側の一部は調査区外に延びる。主軸方位はN-77°-Eである。西側の梁間の全長は4.1m、柱間は北側が1.9m、南側が2.2m、桁方向の柱間は2.0～2.3mを測る。なお、南東の桁柱はSD012に切られる。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、径0.25～0.6m、深さ0.5m前後を主体とするが、梁間の



第6図 SB018実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/3)



第7図 SB019実測図（1/60）および出土遺物実測図（5は1/3、6は1/4）

間柱は浅い。覆土はややシルト質の灰茶褐色土である。

出土遺物（第6図）1・2は土師器小皿で、順に復元口径は8.6、10.0cmで、SP174、175から出土した。共に器面の風化が著しく、外底部を含め調整は不明である。胎土に暗赤褐色の粒子を含む。3・4は青磁片で、順にSP182、176から出土した。3は被熱した碗、同安窯系皿I-1b類である。以上から中世の掘立柱建物と推定される。

SB019（第7図） 2×3間の南北棟の建物で、C-3・4で確認した。主軸方位はN-13°-Wを測り、先のSB018と直交する位置関係にある。梁間の全長は北側が3.1m、南側はやや長く3.3m、柱間は1.5~1.7mを測る。また、桁行の全長は共に5.7m、柱間は1.5m~2.1mである。柱穴は円形プランを主体とし、径0.2~0.5m、深さ0.25~0.6mを測る。覆土はシルト質の灰茶褐色土を主体とする。

出土遺物（第7図）5はSP200出土の土師質鉢で、口縁端部は肥厚し、面取りを施す。風化が進む。6は粘土製品で、図の下側は稜線をもって、ほぼ垂直に屈折し、図上側では緩くカーブを描く。裏面および左右は削れ面のため、全体の形状は不明で、器面は荒れる。整形は丁寧ではなく、凹凸が目立つ。SP221から出土した。他に土師器の細片が出土している。中世後半代の遺構であろう。

2) 土坑 (SK)

SK013（第8図） C-1で検出した端正な長方形プランの土坑で、長さ1.1m、幅0.55m、深さ0.4mを測る。壁面は直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は類似した黄褐色系の色調で、堆積状況から埋め土と推定される。出土遺物はない。

SK014（第8図） 調査区北東際のC-1に位置する。北側は調査区外に延びるため、全容は不明であるが、方形状の土坑と考えられる。現況での東西長1.3m、深さ0.4mを測る。底面は平坦であるが、南西隅に小ピットが認められた。覆土は灰茶褐色土で地山ブロックを多量に含む。

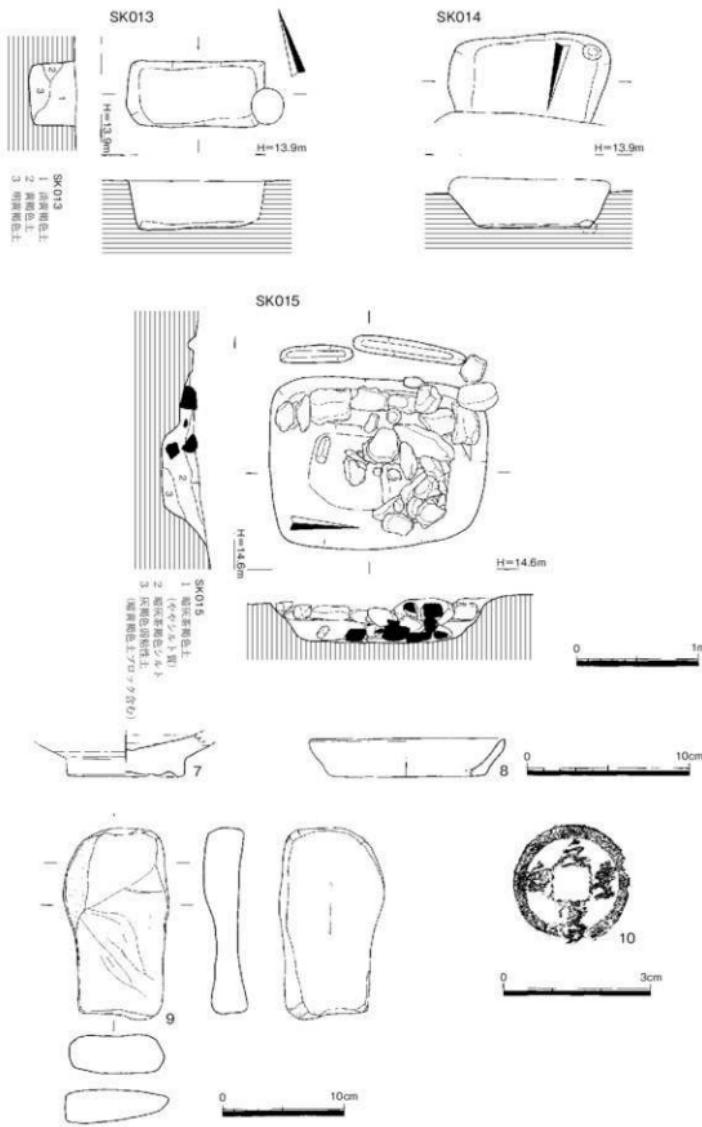
出土遺物（第8図7）白磁碗で、見込みの釉を輪状にカキ取る。外面の下半は露胎である。釉が被熱により荒れる。他に青磁片や被熱した礫が出土した。

SK015（第8図） C-3・4で確認した隅丸方形の土坑である。長さ1.8m、幅1.4m、深さ0.3mを測り、西側には狭いテラスを設ける。そのテラス上と底面の北側部分では花崗岩を主体とする礫を検出した。テラスでは地山直上に1段積みの礫が南北方向に出土し、底面の下段では面を揃えて、据えたように礫が置かれていた。また、上段では石積みが崩落したような状況であったことから、人為的に数段に石が据えられたものと推定できる。なお、礫の半数近くは被熱により部分的に黒変していたが、その部位や方向は一定ではないこと、壁面には被熱の痕跡が認められないことから、土坑内で熱を受けたものではない。また、土坑の西側には、壁からやや離れて南北方向の深い小溝があり、位置関係から土坑に伴う溝であると考えられる。

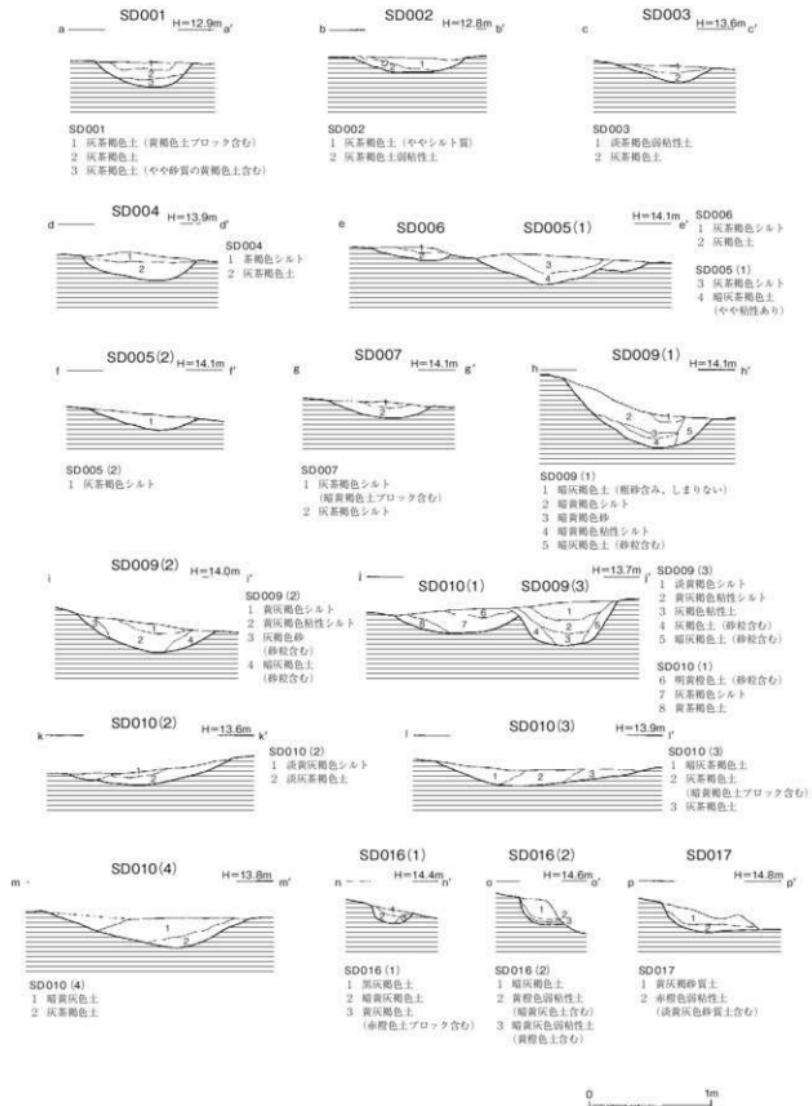
出土遺物（第8図8~10）8は南側の覆土から出土した土師器坏で、細片からの復元であるが、口径11.9cmを測る。風化のため調整は不明である。9はテラス上で出土した砂岩製の砥石で、短辺の両側面を除き、砥面として利用する。10は北宋代の銅錢「元豐通寶」(初鑄年:1078年)で、北東側の上層で出土した。他に土師器の細片が少量出土した。土師器の法量から中世後半の遺構と考えられる。

3) 溝 (SD)

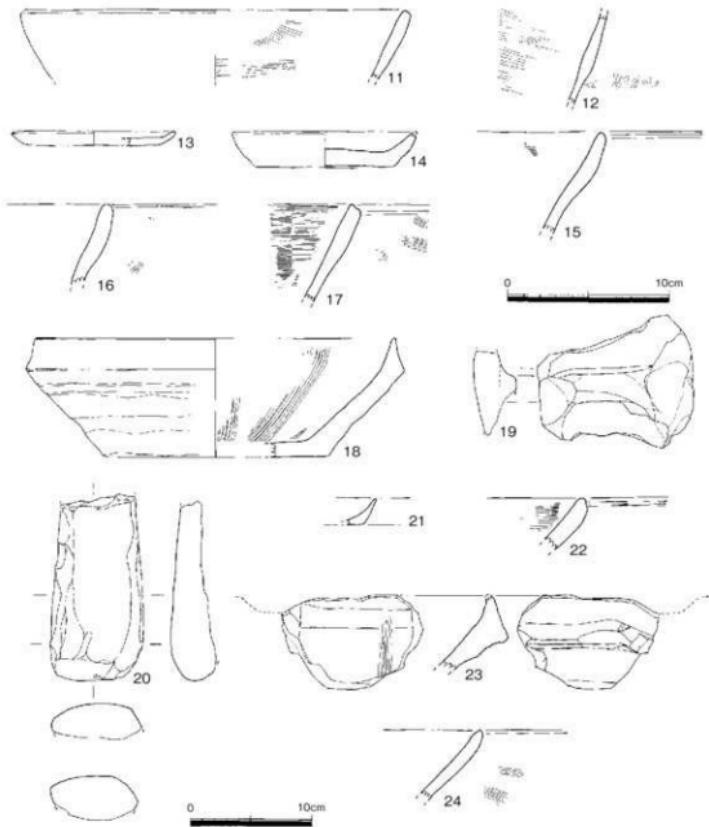
延長方向が類似し、重複が少ないとから掘削時に大きな隔たりがないことが推測される。また、矩形に折れるものがあり、区画的な機能が窺える。出土遺物は少量ながら中世後半期が主体で



第8図 SK013・014・015実測図(1/40)およびSK014・015出土遺物実測図(9は1/4、10は1/1、他は1/3)



第9図 SD001・002・003・004・005・006・007・009・010・016・017実測図（1/40）



第10図 SD002・003・004・005・007出土遺物実測図 (19・20は1/4、他は1/3)

ある。

SD001 (第5・9図) A-3の調査区際に位置する溝で、西側は調査区外に延びる。縁い弧をえがき、南東端部は削平により消失する。幅0.8m、深さ約0.2mを測り、断面は逆台形状をなす。底面は北西側に傾斜する。土師器と平瓦が少量出土しているが、いずれも細片である。

SD002 (第5・9図) SD001の南西側に並行するように弧状に延び、両端部共に調査区外に延伸する。幅0.9m、深さ0.15mを測る。断面は浅皿形で、001同様に底面は北西に傾斜する。

出土遺物 (第10図11) 土師質鉢で、口縁端部は面取りを施す。器面の風化が進むが、内面には横方向の刷毛目が残る。他に瓦質土器の細片が出土している。

SD003 (第5・9図) B-2で検出した「L」字形を呈する溝で、西側は削平により、南側は擾乱により消失するが、南側は後述のSD004に繋がる可能性がある。幅約0.7m、深さ0.15mを測り、北側に向かって深くなる。

出土遺物（第10図12）土師質鍋の口縁部と体部の境界部分の細片で、外面には僅かな段があり、刷毛目が残る。また、内面には横方向の刷毛目調整を施す。他にも土師質土器の細片が出土している。

SD004 (第5・9図) SD003の南側、B-3に位置する東西方向の溝で、西端部は段落ちによって削平される。また、擾乱によって一部しか遺存していないが、北側に延びる溝が連結しており、その北側はSD003に繋がることが推定される。断面は逆台形で、幅0.5~1.0m、深さ0.2mを測り、西側に向かって緩く傾斜する。分岐部分には花崗岩を主体とする角礫が集石され、の中には被熱により黒変した礫が認められた。

出土遺物（第10図13~20）13・14は土師器で、13は小皿、14は壺である。13は細片からの復元であるが口径10.0cmを測り、器面が風化する。14は回転糸切り底で、復元口径11.4cmを測る。板状圧痕はなく、胎土に暗赤褐色の粒子を含む。15~17は土師質鍋の口縁部片で、体部との境界に鈍い段を有する。17の口縁端部は面取りを施す。15・16は器面が荒れるが、17は内外面に刷毛目が残る。18は備前焼の擂鉢で、内傾する口縁部は上方へ引き伸ばし、端部は尖る。内面には9条の擂目が認められる。19・20は混入遺物である。19は風化が進む土師質の円筒埴輪片で、大半は剥落するが断面台形状のタガが残る。20は基部を欠損する玄武岩製の磨製石斧である。14、18~20は集石中より出土した。

SD005 (第5・9図) B-3・4で確認した矩形に折れる溝で、幅0.7~1.0m、深さ0.1~0.25mを測り、断面形は緩い「V」字状をなす。底面のレベルは大差ない。検出時では東側に並行するSD006と僅かに一部が重複していたが、前後関係は確認できなかった。南側は調査区外に延長するが、この南側の第6次調査II区SD-01と一連の遺構になるものと考えられる。全体で「コ」字形に区画する溝となり、南北間の距離は約25mを測る。また、東側は浅くなり途切れ、延長上にSD016が位置するが、断面形が異なっている。

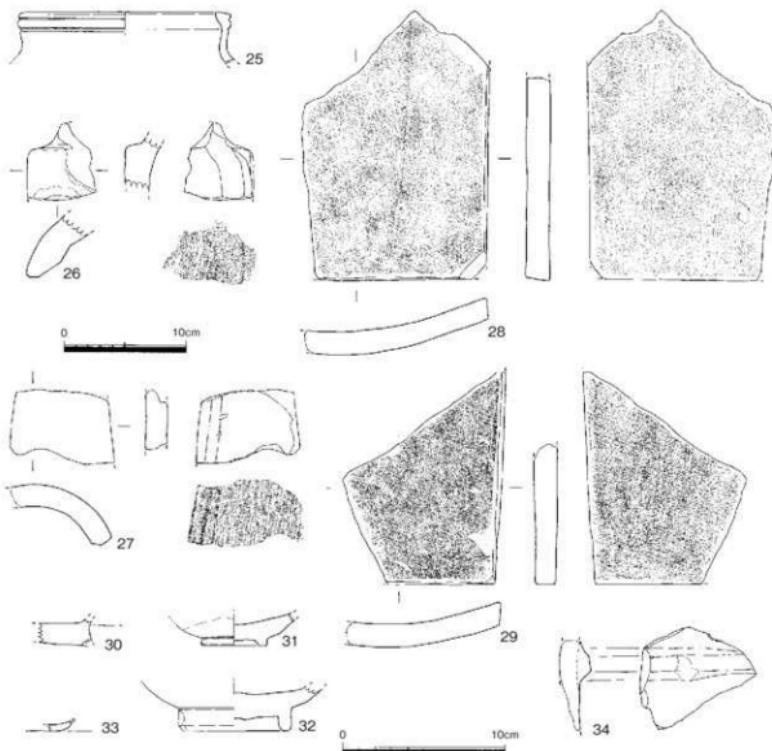
出土遺物（第10図21~23）21は土師器小皿、22は土師質鍋の細片である。22の内面には横方向の刷毛目が残る。23は片口の一部が遺存する備前焼の擂鉢で、18に比して口縁下角が突出し、上端部はやや丸味を帯びる。暗赤褐色の色調である。他に青磁の細片等が少量出土している。

SD006 (第5・9図) SD005の南北部分の東側に並行する溝で、幅0.4~0.8m、深さ0.1mを測る。005同様に南側は調査区外に延伸する。北側端部は削平により途切れるが、後述の東西方向のSD007に連続する矩形の溝であると推測される。出土遺物には土師器等が数点あるが、いずれも細片である。

SD007 (第5・9図) B-C-3で検出した東西方向の溝である。東側では削平により途切れる箇所がある。上述のとおり、南北方向のSD006と同一遺構の可能性が高い。断面は006に類似した浅皿形を呈し、幅0.5m前後、深さ0.15mを測る。

出土遺物（第10図24）土師質鍋の口縁部片で、端部には狭い面取りを施す。外面は刷毛目をナデ消す。他に土師器の細片が少量出土している。

SD009 (第5・9図) B-C-D-2に位置する東西方向の溝で、東側は調査区外に延長するが、擾乱により不明瞭となる。緩い段落ちに並行して設置されており、南側の肩が高い。j-j'の土層図に示すように北側に並行するSD010に後出する。幅0.8~1.3mを測り、底面は全体的に西側に

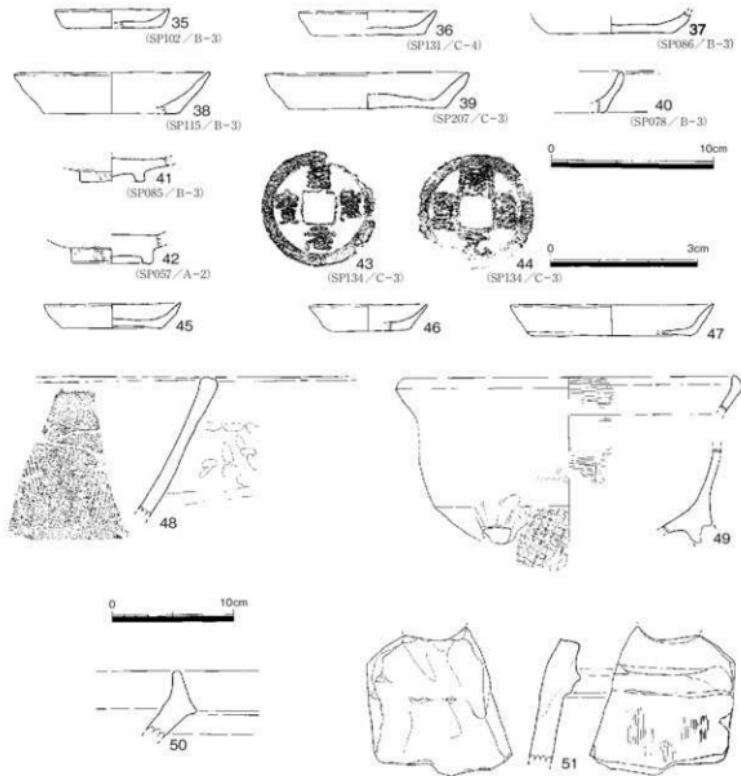


第11図 SD009・010・011・016出土遺物実測図 (27~29・34は1/4、他は1/3)

向かって低くなるが、j-j'付近では断面台形の土坑状の掘り込みを確認した。

出土遺物（第11図25~29）25は陶器の壺で、口縁部外面には2条の沈線が巡り、短い頭部が付く。淡褐色の釉が薄く施される。26~29は瓦である。26・27は土師質の丸瓦で、26は玉縁が僅かに残る。共に側面は2面のヘラ削りを行い、凹面には布目が認められる27の凸面は丁寧なナデにより仕上げる28・29は黒灰色の瓦質の平瓦で、側面および端面には1面のヘラ削りを施すが、側面の凹面側に面取り風の浅い削りが認められる。凸面は綫方向のヘラナデ、凹面はナデ調整を行う。他にも瓦片が出土しているが、軒瓦はない。

SD010（第5・9図）SD009の北側に位置し、009に先行する矩形の溝である。東側は調査区外に延び、北側は搅乱によって消失する。また、南北部分では小溝と重複する。北端部ではやや低くなるが、幅は1.5m前後、深さ約0.2mを測る。底面は東端部が最も高く、北端部が低い。コーナー部から東へ約4m付近には底面から浮いた状態で、人頭大に近い花崗岩約10個が集石されて



第12図 ピットおよび遺構検出時出土遺物実測図 (43・44は1/1、48・49・51は1/4、他は1/3)

いた。

出土遺物（第11図30～32）順に土師器椀の細片、陶器碗、青磁碗である。31の胎土は暗赤褐色を呈し、内面および外面上半に線釉が掛けられる。32は墨付きおよび高台内は露胎で、胎土は軟質である。他に瓦片や古墳時代の須恵器細片等が出土している。

SD011（第5図）B・C-2で検出した。「L」字形の屈曲部から弧状の溝が南東方向に延びている。検出時には重複の可能性が考えられたため、分岐付近の精査に努めたが、前後関係は確認できなかった。幅0.5～1.0m、深さは0.1mに満たない浅い溝で、覆土はシルト質の灰茶褐色土を主体とする。北側のみ調査区外に延長する。

出土遺物（第11図33）土師器小皿の細片で、器面の風化により調整は不明である。他にも部位不明の土師器細片が少量出土している。

SD012 (第5図) C・D-2で確認した東西方向の溝で、SB018の南側桁柱の1つを切る。東側は調査区外に延びる。幅約0.6m、深さ0.05mを測り、断面は浅皿形を呈する。覆土は灰茶褐色土を主体とする。出土遺物には土師器、土師質土器があるが、いずれも細片である。

SD016 (第5・9図) 東西方向の溝で、C・D-2に位置する。中央部は削平により僅かに途切れ、東半部の北側の肩は段落ちによる搅乱で失われる。幅約0.4m、深さ0.1~0.2mを測り、断面は「U」字形をなす。底面は西側に向かって傾斜している。

出土遺物（第11図34）混入した土師質の円筒埴輪片で、断面台形状のタガが巡る。器面の風化が著しい。他に中世の土師器や土師質土器の細片が少量出土している。

SD017 (第5・9図) 尾根線に沿うように設けられた南北方向の溝で、D-2・3で検出した。幅1m前後、深さ0.2mを測る。西側の肩は削平を受けるが、断面は逆台形状を呈するものと思われる。出土遺物には中世末から近世の陶器の細片が少量ある。

4) その他の遺物

最後にピット（SP）、遺構検出時の出土遺物について報告を行う。

ピット (第12図35~44) 35~40は土師器である。35・36は小皿で、細片からの復元であるが、口径は順に7.0、8.4cmを測る。共に器面の風化が著しく、外底部を含めて調整は不明である。36の胎土には赤褐色の粒子を少量含む。37~40は坏である。外底部が遺存する3点は回転糸切り底で、板状圧痕は認められない。また、口縁部が残る38・39の口径は、順に12.0、12.4cmを測る。41は角高台を有する白磁皿で、乳白色の釉が高台まで垂れるが、高台内は露胎である。胎土はやや軟質で、淡黃白色を呈する。42は明代の龍泉窯系青磁碗である。淡緑色の釉が掛かるが、豊付きおよび高台内には施釉しない。底部は肉厚で、見込みは僅かに凸状をなす。43・44は銅鏡で、2枚の背面が銹着して出土した。43は北宋代の「紹聖元寶」(初鑄年: 1094年)、44は唐代の「開元通寶」(初鑄年: 621年)である。なお、以上の遺物の出土遺構は、遺物番号の下にグリッド名と共に記載している。

遺構検出時 (第15図45~51) 遺構検出作業時に採集した遺物である。45~47は土師器で、45・46は小皿である。順に復元口径は8.3、7.2cmを測る。共に器面の風化が進み、調整は不明であるが、45の外底部には回転糸切りの痕跡が僅かに残る。46は黒褐色の色調を呈する。47は復元口径12.4cmの坏で、板状圧痕を有する回転糸切り底である。48は土師質土器の擂鉢である。口縁端部は面をなし、外面は指オサエによる調整を施す。内面には5条単位の擂目を有する。49はいわゆる防長系の瓦質土器足鍋で、口縁端部は内面に屈曲する。格子目叩きを施す体部外面下半と刷毛目をナデ消す上半との境界に稜線が認められる。内面の上半には刷毛目調整を残すが、下半にはナデを加える。脚部はナデツケにより体部と接合するが、基部のみが遺存する。50は備前焼擂鉢の口縁部片で、上方に立ち上がる端部はやや丸味がある。51は土師質の円筒埴輪で、大半が欠損するものの、円形透かしが残る。タガの上面は強いヨコナデにより凹面を呈する。内面には粘土紐の接合痕跡が認められる。

3. 結語

今回の調査では、SD010とSD005 (SD016) で方形に区画される戦国期の屋敷地を2区画確認することができた。その内部には溝に並行（直交）し、北側の前者にはSB018、南側の後者にはSB019の建物が各1棟存在する。なお、本文でも触れたが、南側の区画の延長は第6次調査II区SD-01と一連で、「コ」字形の区画が復元できる。西側を除き大塚古墳を取り囲むようにこれまで複数検出されている方形区画の屋敷地の一画である。周辺の屋敷地の概要はp 30を参照されたい。

IV. 第20次調査の記録

1. 概要

今回報告する大塚遺跡第20次調査区は、西区今宿町308-1、309、310-1に所在し、調査前の現況は標高約14.2～14.7mを測る家屋解体後の平地である。調査地点は遺跡の東部に位置し、隣接する北側では第18次、同様に西側では第6次および第19次、南側では第21次の各調査が実施されており、本調査地点が位置する丘陵の東側では、第3次、第11次調査が行われている。

本調査区は、大塚古墳の南東側にあり、同古墳の占地する舌状丘陵の東側斜面に立地するが、造成のため平地となっている。第18次調査区との間は生活道として使用するために平坦に削平されており、本調査区北側は段落ちとなっている。確認調査の結果、採集遺物や北側の第18次調査成果から弥生時代後期の集落が拡がるものと推測された。

調査区は表土から地表から20～30cmほどで遺構面に達する。遺構面の標高は北側で約13.9m、南側で約14.4mを測る。表土下および客土の直下に花崗岩風化層に起因する黄褐色の遺構面があり、南側が高く、北側の第18次調査区に向かって傾斜する。調査区の東側および南側では削平により花崗岩風化礫層が露出し、遺構密度は希薄であった。また、調査区北側の一部には、第18次調査から続く、弥生時代後期の遺物を多量に含む谷の包含層と考えられる黒褐色土が薄く堆積していたが、本調査区内ではこの層からは遺物の出土はなかった。

遺構検出面は、遺構面上面までを重機で剥ぎ取り、以下は人力による作業を行った。今回の調査では、中世の掘立柱建物やピット、それを区画する溝を主体として確認できた。また古代の土坑や古墳時代の石室も検出した。遺物としては、土師器や陶磁器のほかに、弥生時代の土器も小片であるが出土した。出土遺物量は、コンテナケースにして1箱である。

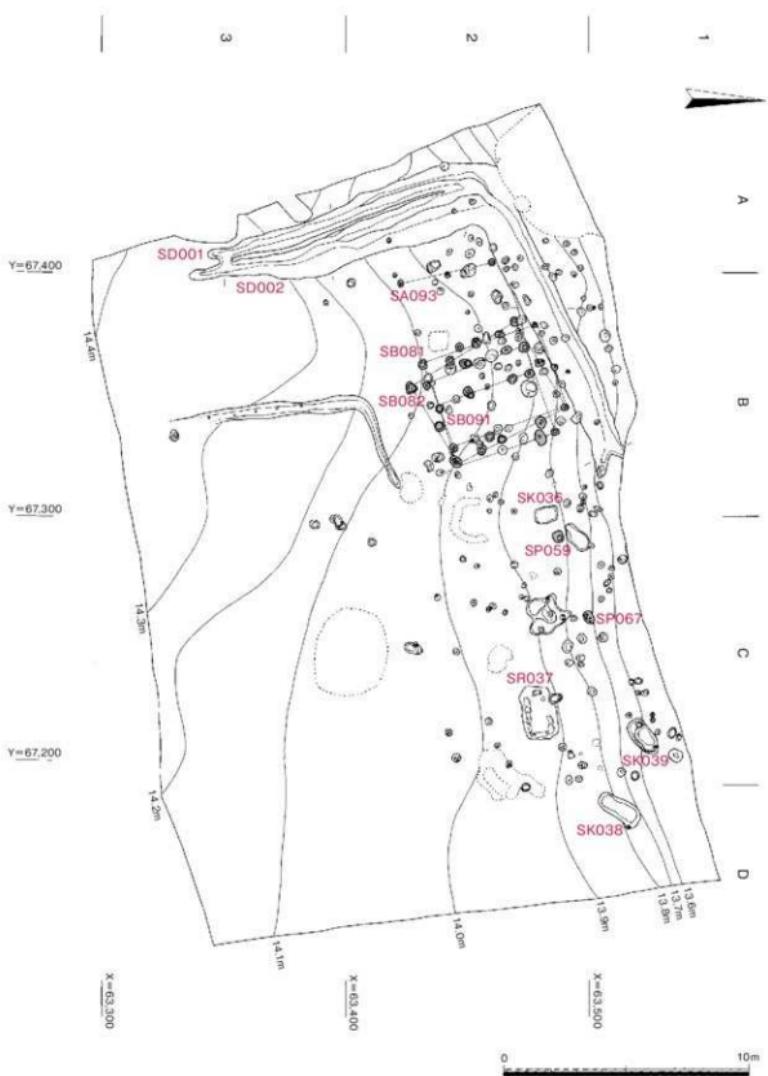
発掘調査は平成24(2012)年8月6日に着手した。まず、重機による表土剥ぎから開始し、機材の搬入、調査区内杭打ち、壁面清掃、遺構面保護、日本測地系によるトラバース杭の設定、平板測量等を実施し、20日から遺構検出を開始した。順次、西側から検出遺構の掘り下げや写真撮影、遺構の図化、遺物取り上げ等の作業を進め、遺構の掘り下げがほぼ終了した10月25日に、ラジコンヘリコプターによる全体写真の撮影を行った。その後、残る図化作業や個別遺構写真撮影、土器洗浄、片付け等を終え、10月31日に第20次調査を完了した。

なお、調査対象面積は例言のとおり672m²であったが、実際に作業を行った面積は618m²である。調査時の遺構番号は001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番はあるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、掘立柱建物や柵列を構成する柱穴については、報告の便宜上必要に応じて遺構毎に応じてP 1から順に番号を付した。

2. 遺構と遺物

以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における日本測地系による10m単位の平面座標を基本とした英字（西から東にA～D）と数字（北から南に1～3）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第13図参照）。

第20次調査では、掘立柱建物、柵列、土坑、溝、石室、ピットを検出した。これらの遺構は調査区の北側から西側において確認した。南側および東側では遺構検出を行った時点で花崗岩風化層が露出しており、遺構の密度は希薄であった。これは、後世の造成により遺構面が削平されてしまったためと考えられる。



第13図 第20次調査区全体図（1/200）

1) 掘立柱建物 (SB)

調査区北西側において、3棟の掘立柱建物を確認した。周辺には多数のピットを検出したが、建物として復元できたのはこの3棟のみである。各柱穴の覆土は、灰茶褐色土を主体とする。なお、梁間および桁間の計測表を、第2表に示した。

SB081 (第14図) 調査区北のB-2に位置する2×3間の建物である。いくつかのピットからは細かい土器片が出土したが、図化できなかった。

SB082 (第14図) 調査区北のB-2に位置する2×3間の建物である。P2の床面付近からは根石と思われる石が2点出土した。その他のいくつかのピットからは細かい土器片が出土したが、図化できなかった。

SB091 (第15図) 調査区北のB-2に位置する2×3間の建物である。図中にアミをかけて示したピットからは、スサ混じりの窓壁あるいはかまどの一端と思われる遺物がそれぞれ2~30点出土した。のことから、これらのピットは同時期に埋まった可能性が高いと考えたので、掘立柱建物として報告する。しかし、柱間の距離が不揃いなので、建物として成立するか疑問は残る。また、その他にいくつかのピットから細かい土器片が出土したが、図化できなかった。

2) 構列 (SA)

SA093 (第15図) 調査区北西のA-2で検出した構列である。3本の柱穴が北から南に向かって並ぶ。ピットからは土器細片が出土したが、図化できなかった。

3) 土坑 (SK)

SK036 (第16図) 調査区北側のB・C-2で検出した。平面プランは不正形な隅丸長方形を呈し、長さ1.0m、幅0.68m、深さ0.3mを測る。壁面はほぼ直に作られ、底面は平坦である。遺構の縁には幅約4~5cmの赤褐色の非常に硬く焼き締まった粘土が貼りついており、遺構の下半分には細かい炭が厚く堆積している。遺構上面の覆土は、細かな炭混じりの暗茶褐色粘質土を呈する。出土遺物は確認されなかった。

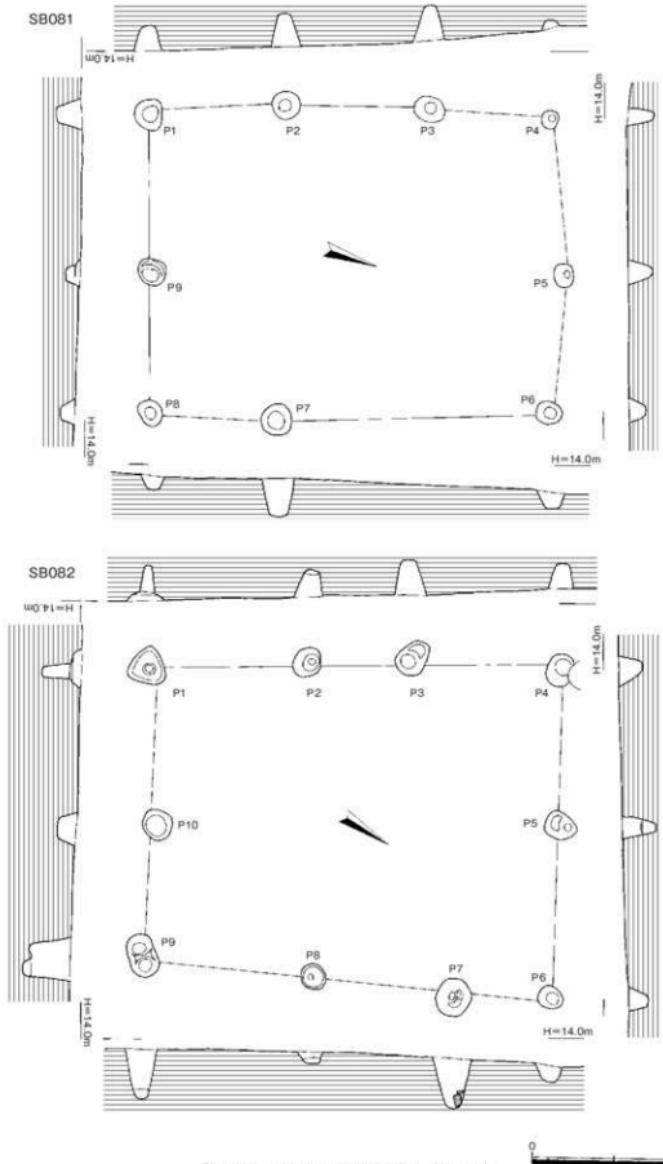
SK038 (第16図) 調査区北東のD-1で検出した。平面プランは楕円形を呈し、長さ1.98m、幅0.84m、深さ0.24mを測る。床面は平坦である。覆土は粘質土で、やや粘性が強い。

出土遺物 (第16図) 1は、外径4mm、内径1mm、厚さ3mm、重さ0.08gの淡青色透明を呈するガラス製小玉である。遺構の北側を数cm掘り下げたところで検出した。福岡市埋蔵文化財センターにおいて蛍光X線分析を行った結果、第16図に示すとおり、Si、Kの値が高く見られ、カリガラスの可能性が高いことがわかった。Cuは着色のためのものと考えられる。また、写真で示してあるとおり、顕微鏡を用いてガラス内部の透過光観察を行ったが、気泡に現れる製作技法に関わる特徴は観察できなかった。このガラス製小玉以外の遺物にも、弥生土器の小片や黒曜石が出土したが、いずれも小片で図化できるものはなかった。

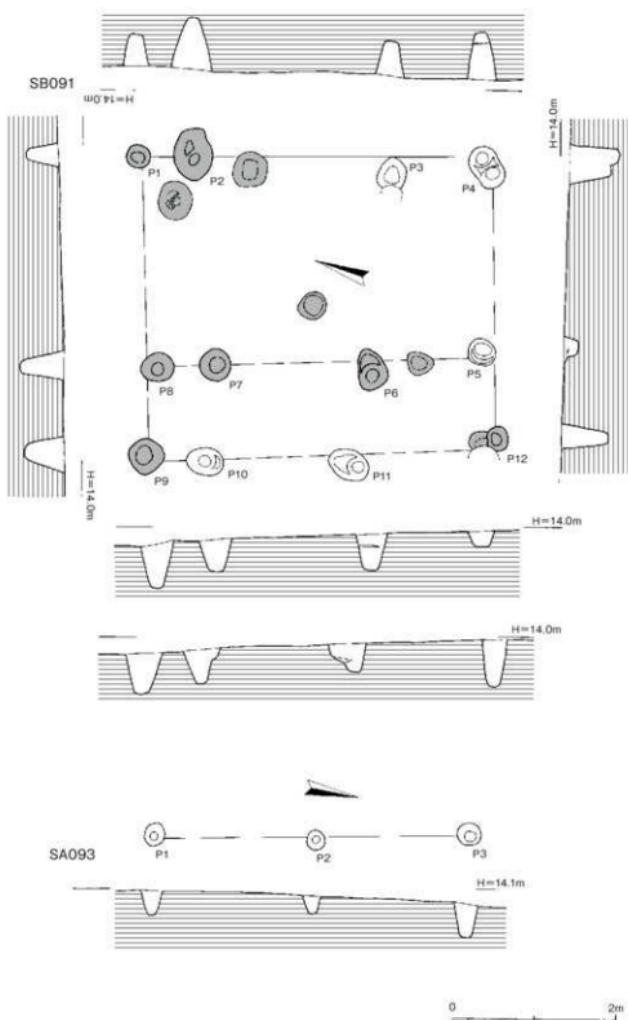
SK039 (第16図) 調査区北東のC-1で検出した。長さ1.62m、幅0.83m、深さ0.31mを測る不整形の土坑である。出土遺物は確認されなかった。遺構の覆土は上から、黄褐色粘質土、褐色粘質土、灰茶褐色粘質土を呈し、下層には炭化物がごく少量混じる。床面付近でピット状の遺構を検出したが、覆土の変化が見られなかったことから、これらはSK039と同一の遺構であると考えられる。

4) 溝 (SD)

調査区内において、計3条の溝を確認した。そのうち、B-2に位置する溝は、深さ数cmと浅く、また中心に細い木杭が並んで打ち込んでおり、それらの腐食があまり進んでいなかったことか



第14図 SB081・082実測図 (1 / 60)



第15図 SB091・SA093実測図（1/60）

第2表 挖立柱建物計測表

SB082

柱穴番号	梁行柱間 (m)
1-10	1.9
5-4	2.0
6-5	2.1
9-10	1.7
柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	2.0
2-3	1.2
3-4	1.9
6-7	1.2
7-8	1.8
8-9	2.0

SB081

柱穴番号	梁行柱間 (m)
1-9	2.0
4-5	1.9
5-6	1.7
8-9	1.7
柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	1.7
2-3	1.8
3-4	1.5
6-7	3.35
7-8	1.6

SB091

柱穴番号	梁行柱間 (m)
1-8	2.6
8-9	1.1
4-5	2.2
5-12	1.1
柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	0.7
2-3	2.45
3-4	1.2
8-7	0.7
7-6	1.95

SA093

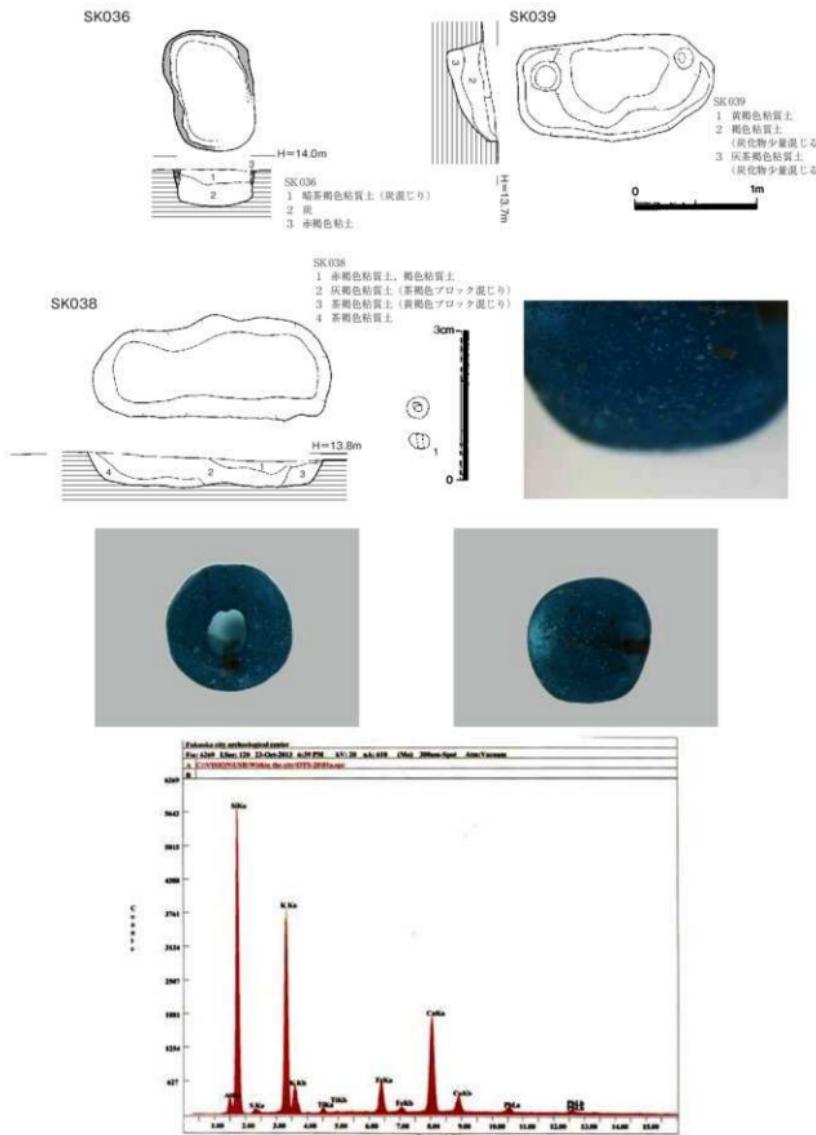
柱穴番号	柱間 (m)
1-2	2.0
2-3	1.9

ら、近代以降の溝であると判断した。

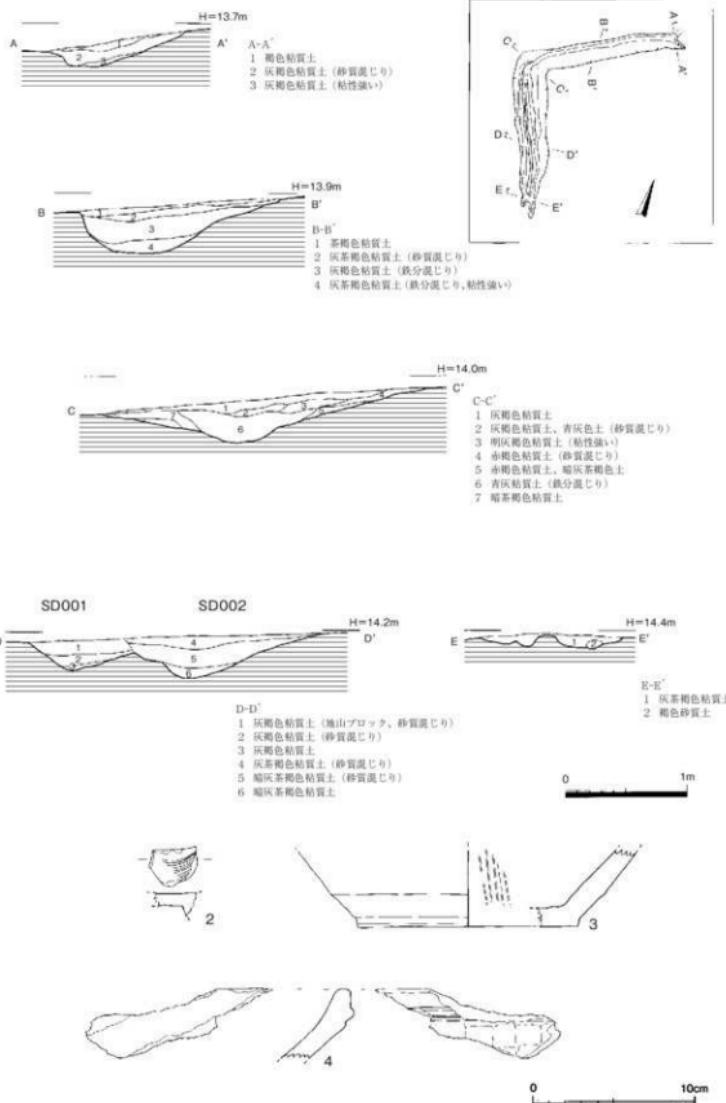
ここでは、その他に確認した2条の溝について報告する。調査区区の西側で検出された。幅は1.2m～3mを測る。検出当初は、1条の溝として認識していたが、調査を進めるうちに、2条の溝が切り合っていることが判明した。第17図の土層断面D-D'に見られるように、SD002がSD001を切って掘り返しが行われていることが確認された。土層断面E-E'では、2条の溝が観察できるが、覆土は同一である。遺構の東先端は調査区北側の段落ちによって削平されているが、二股に分かれていることが平面プランで確認できた。しかし、土層断面A-A'では1条のみの状況であることがわかる。土層断面A-Cにおいては完全な掘直しが行われたとみてよいだろう。以下、それぞれの溝について述べる。

SD001（第17図） 調査区西側のA-1～3で確認した。SD002に切られている。出土遺物は、土師器小片や土器小片が10点ほど確認されたが、いずれも摩耗が激しく図化できるものはなかつた。

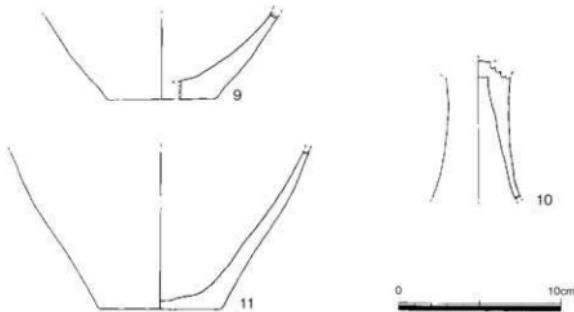
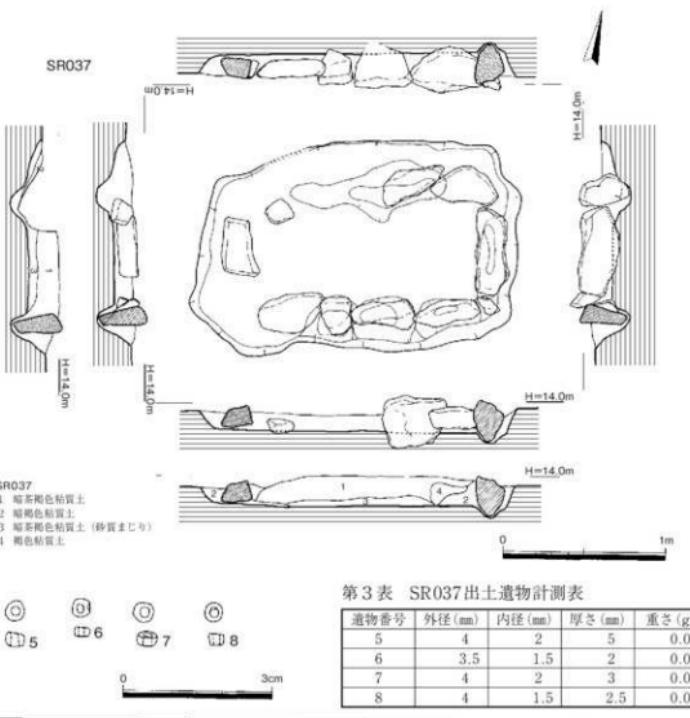
SD002（第17図） SD001同様、調査区西側のA-B-1～3で確認した。調査区北西で矩形に曲がり、東端は緩やかに立ち上がる。第17図のC-C'の下層には、グライ化した、鉄分混じりの青灰粘質土が堆積しており、一時水の滞留があったと考えられるが、そのほかの覆土や堆積状況か



第16図 SK036・038・039実測図（1/40）およびSK038出土遺物実測図（1/1）



第17図 SD001・002土層断面実測図（1/40）およびSD002出土遺物実測図（1/3）



第18図 SR037実測図 (1/30) およびSR037・その他の出土遺物実測図 (5~8は1/1、その他は1/3)

ら當時水が堆積していたわけではなく、砂の堆積も見られないことから、流路ではないと考えられる。また、現在の地形は北側に向かって緩やかに低くなっているが、この遺構の覆土が南から北に向かって堆積していることから、この遺構が埋まつていていた時期においても同様の地形であったことが推測される。

出土遺物（第17図） 弥生土器小片、土師器片、鉄滓、黒曜石などが出土しているが、摩耗が激しく、団化できたものは以下の4点のみである。

2は同安窯系白磁碗である。内面に柳目文がみられる。底部内面は露胎である。胎土は灰白色で、釉はやや黄味がかった灰色を呈する。3は瓦質の擂鉢である。復元底径は13.2cm。全体的に摩耗が激しいが、内面の擂り目の単位は5本であることが確認できる。灰白色を呈し、胎土には1~3mmほどの砂粒が混じる。4は滑石製石鍋の口縁部である。口縁部が内湾しないもので、外面口縁下位には低い鶴がめぐる。外面の調整は縱方向の削りで、一部煤の付着が見られる。内面には細かいキズが見られるが、調整の跡は観察できない。また、再加工の跡は確認できない。

5) 石室 (SR)

SR037（第18図） 調査区北東のC-2で検出した。重機で表土を剥ぎ取る際に、表土直下で粘性の強い、しまりのある黒褐色の覆土と、方形に並べられた石の表面が確認された。遺構の大きさは長さ1.92m、幅1.25m、深さ18cmで、隅丸長方形を呈する。北西側は一部ピットにより切られている。残存していたのは基底部の1石のみであった。また、北側には検出時には石があったが、現位置を留めていなかったため、除去した後に調査を行った。使用されている石材はすべて花崗岩である。周辺の精査を行ったが、この遺構に伴う他の遺構は確認されなかった。

出土遺物（第18図） 遺構埋土を取り上げてふるいにかけ、洗浄した結果、滑石製白玉が4点確認された。それぞれの計測値は第3表に示すとおりである。その他にも土器小片が30点ほど出土したが、団化できるものはなかった。

6) その他の遺物

最後に、ピット（SP）からの出土遺物および遺構検出時の出土遺物について報告を行う。

ピット（第18図） 9・10は弥生土器である。9はSP059から出土した壺の底部である。復元底径は6.6cm。外面および内面の調整は磨減しており不明である。橙色を呈し、胎土には1~3mmの白色粒を含む。10はSP067から出土した高坏の脚部である。外面および内面の調整は磨減しており不明である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には1mmほどの白色粒を含む。

遺構検出時（第18図） 11は、調査区北側の段落ち部分で出土した。弥生土器の壺の底部である。復元底径は7.4cm。外面および内面の調整は磨減しており不明である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には1~8mmほどの白色粒を多く含む。これらの遺物は、北側の第18次調査区との境目で出土しており、第18次調査区で検出された谷の包含層出土の遺物と同時期であると考えられる。

3. 結語

今回の調査区は大塚遺跡の東端に位置し、掘立柱建物、溝、ピット、土坑、石室が検出された。これまでの大塚遺跡の調査同様、中世の遺構が中心となるが、一部古代の遺構や弥生時代の遺物が検出された。以下、時期変遷を概観しておく。

本調査で最も古い遺物はピット内および北側段落ちから出土した弥生時代後期の土器片である。これらは、第18次調査で検出された谷の西側に展開していた当該期の集落およびそこから谷へ廃棄された遺物からの混入品であると考えられる。調査区内では、大塚遺跡と今宿五郎江遺跡との間に広がる谷の谷尻が調査区内で確認されたと理解している。

次にSK038から出土したカリガラスの小玉が挙げられる。カリガラスは、主に弥生時代に盛行し、古墳時代になると衰退する。この遺物は、出土位置が遺構上面であり、流れ込みの可能性も考えられる。流れ込みであるとすると、上記で述べたように第18次調査の弥生時代の集落および谷の包含層からのものか。仮にこの遺物がSK038に伴うとすれば、弥生時代の遺構であると考えられるが、このガラス小玉の他に出土遺物が確認されなかつことから、時期を特定するには至らない。

調査区東側で検出された石室内からは、滑石製白玉4点と土器小片が出土したのみで、時期の特定は困難である。本調査区の北西に位置する大塚古墳は、主体部の調査は行われていないものの、トレンチ調査および周辺で採集される埴輪から、その築造時期を6世紀前半であるとされている。

古代の遺構としてはSK036が挙げられる。今宿地域では、低チタンの良質の砂鉄を産出する花崗岩地帯であり、大塚遺跡周辺には奈良時代前後では製鉄関連の遺跡が多く存在している。大塚遺跡第14次調査と鎌崎製鉄A遺跡第1次調査では製鍊炉と横口付炭窯が、飯氏遺跡第8次調査では製鍊炉と鍛冶炉がみつかっている。鎌崎製鉄A遺跡の横口付炭窯は7世紀後半～8世紀に位置づけられ、周辺で検出された焼土坑のうち、略三角形を呈すものと小形のものは製炭窯の可能性が考えられる。大塚遺跡第14次調査の製鉄関連遺構は、7世紀前半段階と8世紀中頃の2時期に分けられる。また、大塚遺跡第10次調査においても、製炭土坑の可能性のある焼土坑が1基確認されている。そのほか徳永B遺跡第3次調査においても製炭土坑と思われる焼土坑が検出されている。平面形は隅丸楕円形、不整台形を呈するもので、うち1基からは土師器坏、高台付坏が出土している。いずれも壁の上半部が焼成のため赤変し、土坑内からは炭化物が多量に出土している。

加えて、今回の調査で検出したSK036は、「(方形製炭土坑は) 平面規模の変動は大きいが、ゆるやかな規格性があり、おおむね長軸1.0m×短軸0.6mとなる事例が多い。(中略) 床面の比熱は弱く、壁面上方が強く被熱する。土坑内部の土層堆積は、一般的には床面から「炭化物層→自然堆積」となる」(小嶋2012) という特徴を備えており、製炭土坑であると考えられる。他の遺跡の事例は、遺跡内に散在して複数みつかっているが、今回は単体でのみの検出である。遺構内から遺物の出土ではなく、時期の特定は困難である。しかし、遺構の規格と周辺の状況から、特に大塚遺跡第14次調査の成果から、8世紀中頃の時期を想定している。

本調査区内で中心となるのが、中世の遺構である。SD001およびSD002は、大塚遺跡のこれまでの調査で検出されている区画溝と同様の性格を持つと考えられ、その内側で検出された掘立柱建物および多数のピットは、区画溝内の屋敷跡の一部であると考えられる。大塚遺跡で区画溝が確認されているのは、第6・7・13・16・17・18・19・20・22次調査で、大塚古墳周辺のおよそ南北260m、東西130mの範囲の低丘陵上である。以下に、これまでの大塚遺跡で検出された中世遺構について述べ、今回の調査と比較してみたい。

第6次調査：調査区東側で方形区画溝と掘立柱建物2棟以上、調査区西側で掘立柱建物10棟以上が検出されている。区画の大きさは東西20m以上、南北10m以上ある。時期は16世紀前半が主体であると考えられる。

第7次調査：調査区北側で、第16次調査から続く溝および掘立柱建物が1棟検出されている。また、調査区南東側で方形区画溝および掘立柱建物、土坑、石組井戸が見つかっている。区画の大きさは推定で東西22m、南北17mを測る。時期は16世紀前半が主体であるとみられる。

第13次調査：調査区南東部で掘立柱建物3棟以上、柵列1条、大型長方形竪穴状遺構、井戸が検出されている。15世紀後葉から16世紀前半の時期であるとみられる。検出された溝群は用水路として報告されている。

第16次調査：調査区北端・南端にそれぞれ東西方向に走る溝が検出され、その間に掘立柱建物8棟、土坑が検出されている。区画の範囲は20～30mを測る。時期は16世紀前半が主体である。

第17次調査：溝による長方形区画が10群前後見つかっている。区画の規模は15～25m前後。区画の内外からは掘立柱建物20棟以上、柵列10条以上、石組井戸1基、土坑19基が検出されている。16世紀前半～後半段階まで存続する。

第18次調査：未報告だが、調査区西側で南北方向に走る溝と2棟の掘立柱建物が検出されている。

第19次調査：2区画の方形区画溝とそれに囲まれた掘立柱建物がそれぞれ1棟ずつ検出されている。

第20次調査：調査区北西で方形区画溝と掘立柱建物3棟が検出されている。

第22次調査：第7次調査・第16次調査から続く3条の溝および4棟以上の掘立柱建物が検出されている。時期は16世紀前半である。

大塚遺跡の中世後半期の集落の中心は北側で、遺構の数も多く規模も大きい。今回の調査で確認したSD001・002は区画の大きさが約11mと、他の調査区で検出されている区画溝に比べてやや小規模で、出土遺物から見ると中世前半期に該当する。2点のみの小片の遺物で時期を断定することは困難であるが、他の調査区内において中世前半期の遺構が見られないことから考えて流れ込みであることは考えがたい。今回の調査で検出された溝と掘立柱建物に関しては、大塚遺跡が中世後半期に区画溝をもつ大規模な屋敷地を形成する前段階において、小規模ながら区画溝に囲まれた屋敷地が存在していた可能性と、中世後半期まで下る可能性の両方を示しておきたい。

【引用・参考文献】

小嶋篤 2012 「大宰府成立前後の鉄生産－製炭・製鉄・鍛冶・鉄器－」『生産と流通』九州考古学会・嶺南考古学会

V. 第21次調査の記録

1. 概要

今回報告する大塚遺跡第21次調査区は、西区今宿町273-1、273-4、274-1に所在し、調査前の現況は標高約11.7mを測る。大塚遺跡は、糸島平野東縁の小平野である今宿平野の東側に位置し、高祖山から北へ延びる丘陵部に位置する。発掘調査地点は、東西に走る今宿バイパスの北側に立地し、隣接する南側では今宿バイパスを施工する際に第4次調査が行われており、弥生時代後期から弥生時代終末期の竪穴住居、古墳時代終末期の竪穴住居と溝状遺構、奈良時代の竪穴住居と溝状遺構などが確認されている。また、道路を挟んだ西側と今宿バイパスの真下にあたる南側では第2次調査が行われており、弥生時代後期後半の溝状遺構が確認されている。

現況は荒地であり、層序は上層から5cm程のアスファルト（1層）の下に、5cm程の灰黄褐色土細礫混じり（2層）、5~10cm程の灰褐色砂（3層）、5~40cm程の黒茶褐色細砂（8層）、20cm程の黄褐色シルト（10層）となる。さらに南側の遺構上面では10~20cm程の暗黄灰褐色シルト（18層）があり、SX001として後述する弥生時代終末期、古墳時代終末期～中世の遺物を含む包含層がまばらに堆積していた。遺構面の標高は西側で11.4m、東側で10.9mを測り、丘陵の東側裾部に近い沖積地に位置し、東側の谷部へ下る緩斜面上に立地する。

遺構検出は北側では遺構面の上面までを重機による剥ぎ取りを行ったが、包含層が残る南側では、その上面までに留め、以下は人力によって作業を行った。今回の調査では、弥生時代終末期～古墳時代初頭の竪穴住居の他、古墳時代終末期以降の溝などが検出された。出土遺物量はコンテナケース3箱である。弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、金属製品などが出土したが、遺物は細片が多い。なお、上述の包含層SX001から青銅製の勾玉が2点出土した。

発掘調査の経過は、2012年9月3日から重機によって、遺構上面まで剥ぎ取りを行った。その後、杭打ちと平板測量を行った上で、9月5日から本格的に作業員を導入し遺構検出作業を開始した。調査区の南西側から遺構検出、遺構掘削、写真撮影、図化等を行い、遺構掘削が終了した10月19日に高所作業車を使用して全体写真撮影を実施した。その後、残る図化や個別の写真撮影を行い、10月25日に調査を終了した。

なお、調査対象面積は250.0m²であったが周辺の安全対策上、今回実際に発掘調査を行った面積は175.0m²であった。発掘調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用いた。

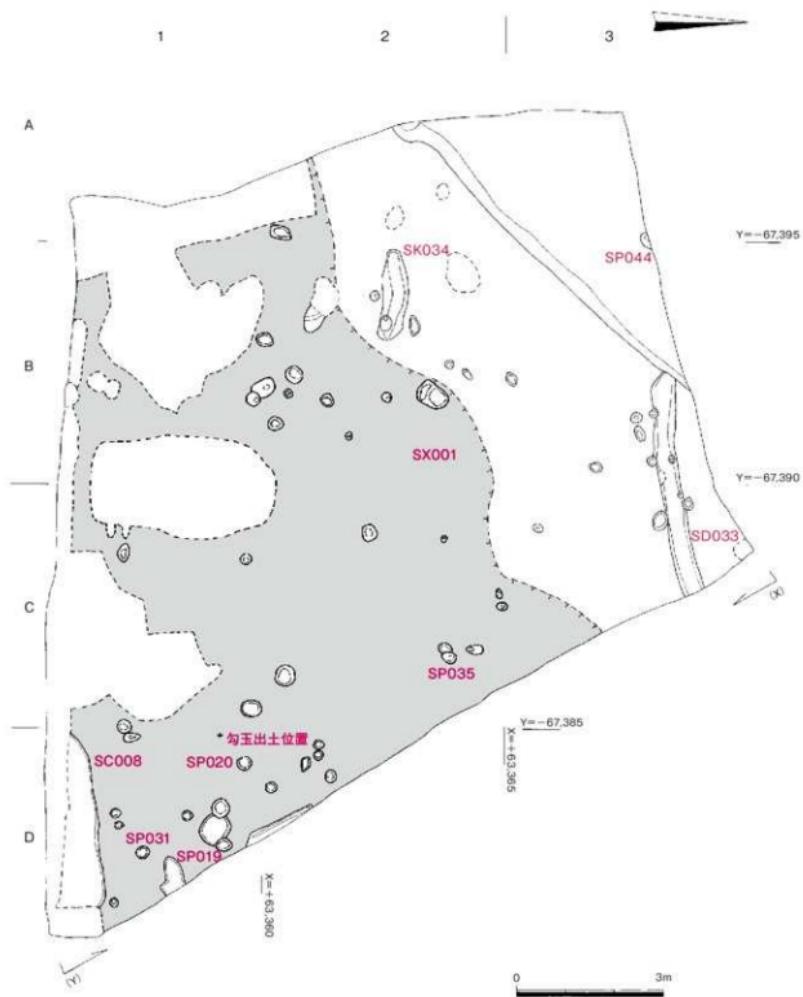
2. 遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における日本測地系による5m単位の平面座標を基準とした英字（西から東にA～D）と数字（北から南に1～3）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第19図参照）。

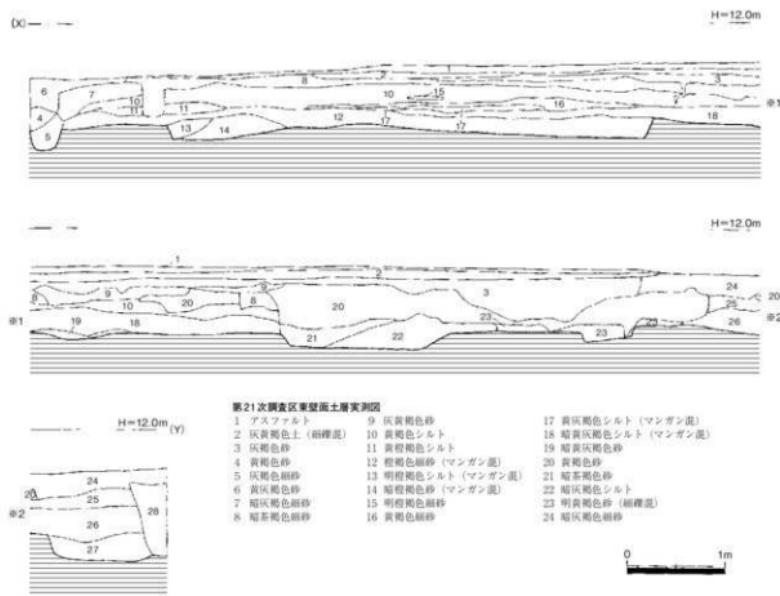
1) 竪穴住居 (SC)

SC008 (第21図) D-1で検出した。南側及び、西側を搅乱によって切られているため、北側の一部のみ検出できた遺構である。長さは東西約3.5m、南北では約0.9mを測り、深さは0.05mほどであった。南側で行われた第4次調査で、18号竪穴住居跡として調査されたもの一部であると想定される。

出土遺物 (第21図) 1、2は弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器である。1は高壺である。器面は内面、外面共に風化が激しい。残存高約8.0cm、復元口径約19.5cmである。2は高さ約



第19図 第21次調査区全体図（1/100）



第20図 第21次調査区東壁面土層実測図（1/50）

4.2cm、復元口径17.2cmをはかる素口縁の鉢で、端部は丸味を帯びる。器面は高坏と同様に内面、外面共に風化が激しい。

2) 土坑 (SK)

SK034(第21図) B-2で検出した。長さは東西1.85m、南北では0.5mを測り、深さは0.12mである。時期としては、土師器と共に須恵器の細片が出土しており、周りの状況も踏まえて古墳時代終末期～古代であると考えられる。

3) 溝 (SD)

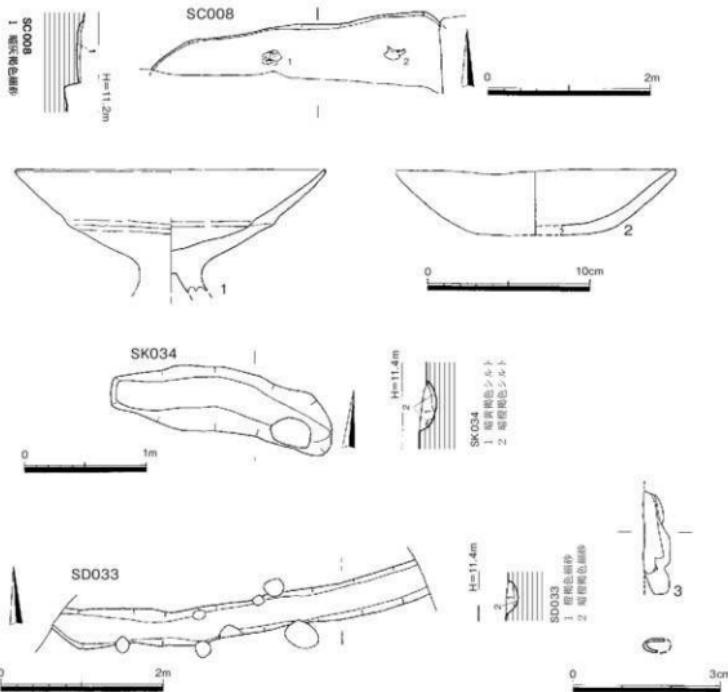
SD033(第21図) BC-3で検出した。長さは東西約4.5m、南北では0.4mを測り、深さは0.14mである。時期としては、古墳時代終末期～古代と推定される須恵器の細片がみられたが、図化は不可能であった。

出土遺物(第21図) 図化できたのは、3の青銅製品1点のみである。長さ4.3cm、幅約1cmをはかる筒状の青銅製品である。用途不明品であるが、管玉等の装飾品に近いのではないかと考えられる。

4) その他の遺物

最後に包含層001(SX)、ピット(SP)の遺構検出時の出土遺物について報告を行う。

SX001 「1. 概要」で述べたとおり、調査区の南側に広がる暗黄褐色シルト層(18層)を

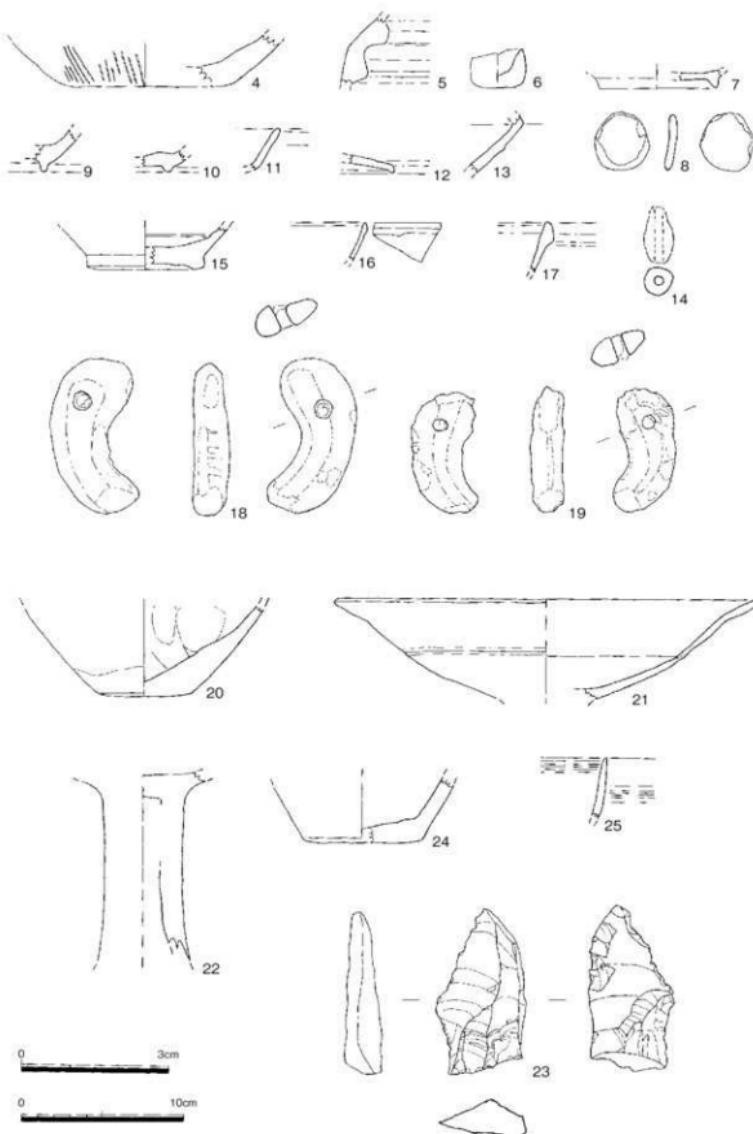


第21図 SC008・SK034・SD033実測図(034は1/40、他は1/60)および出土遺物実測図(3は1/1、他は1/3)

SX001とした。東方向に下る緩斜面上に6cm程度堆積しており、弥生時代終末期、古墳時代終末期～古代、中世の遺物をまばらに含む（第19図の網掛け部分）。

出土遺物（第22図）

4～6は弥生土器である。4は壺である。胴部に刷毛目調整がみられる。底径約9cm、高さ約3.2cmが残る。5は壺である。外面、内面共にナデ調整である。6はミニチュア土器である。底径1.8cm、口径2.8cm、高さ2.4cmで内面、外面共にナデ調整である。胎土に1mm～4mmの砂礫を含む。7、8は土師器である。7は土師器の坏である。底径約7.2cm、高さ約1.1cmが残る。8は円盤状土器である。幅約3.6cmである。内面、外面共にナデ調整である。土器の周囲を打欠き整形したものであろう。9～13は須恵器である。9は坏身である。底径約8cm、高さ約2.6cmが残る。調整は内面、外面共に回転ナデである。10は坏身である。底径約8cm、高さ約1.4cmが残る。調整は内面、外面共に回転ナデである。11は坏身である。口径約14cm、高さ約2.5cmが残る。調整は内面、外面共に回転ナデである。12は坏蓋である。口径約14～16cm、高さ約1.1cmが残る。調整は内面、外面共に回転ナデである。13は壺である。14は土製品である。14は土錘である。長



第22図 SX 001・ビット出土遺物実測図 (18・19・23は1/1、他は1/3)

さ約3.4cm、最大径1.8cmである。調整はナデ調整である。15～17は磁器である。15は白磁の碗である。底径約7.2cm、高さ約2.6cmが残る。内面、外面共にヘラ削りを施し、内面は施釉、外面は露胎である。16は椀である。口径約16～18cm、高さ約2.3cmが残る。内面、外面はヘラ削りによって調整されているが、玉縁状口縁部はナデ調整が行われている。全面に施釉され、黄白色を呈する。17は白磁の碗である。口径約14～16cm、高さ約3cmが残る。内面、外面はヘラ削りによって調整されているが、玉縁状口縁部はナデ調整が行われている。全面に施釉され、乳白色を呈する。18、19は青銅製勾玉で調査区南東のD-1、第19図「×」印で2点の頭部が接して出土した。18は全長3.2cm、中央部幅7～8mm、厚さ6mm、紐孔は正円に近く直径3～4mmである。断面形は楕円形に近い。両端はブロンズ病が著しい。19は全長2.6cm、中央部幅6～7mm、厚さ6mm、紐孔は正円に近く直径2～3mmであり、断面形は楕円形である。18と比較して小さく、両端のブロンズ病もより著しい。

ピット (SP)

SP019 D-1で検出した。20は鉢である。底径約5.8cm、高さ約5.3cmが残る。調整は内面ヘラ削りであるが、外面は磨滅している。底部と内面が黒褐色～灰褐色になっており、被熱を受けた跡と考えられる。

SP020 D-1で検出した。21は高坏である。脚部は欠損しており、口径約26cm、高さ約6.1cmが残る。

SP031 D-1で検出した。22は高坏である。脚部のみが残っており、脚部の高さは約11.5cmが残る。23は黒曜石で、高さ3.4cm、幅1.9cmである。

SP035 C-2で検出した。24は鉢である。底径約7.4cm、高さ約4.1cmが残る。内面はナデ調整であるが、外面は磨滅している。

SP044 A-3で検出した。25は陶器の椀であると思われる。口径約12～13cm、高さ約3.7cmが残る。調整は回転ヘラ削りであり、縁釉を全面に施す。

3. 結語

今回の調査では、弥生時代終末期～古墳時代初頭にあたる堅穴住居と、古墳時代終末期～古代にあたる土坑・溝を検出した。また、弥生時代終末期、古墳時代終末期～古代、中世の遺物を含む包含層(SX001)では青銅製勾玉が2点出土した(表4-1、図23-1・表4-2、図23-2)。

SC008は大塚遺跡第4次調査で確認された18号堅穴住居の続きである。第4次調査ではベット状遺構が確認されたが、今回の調査では確認されなかった。

青銅製勾玉は今回出土したものも含め、全国で5例知られている(表4)。鳥取市の松原10号墳第1埋葬施設は6世紀前半頃(表4-3、図23-3)、神戸市西区の下大谷古墳群1号墳第1埋葬施設は6世紀中頃(表4-4、図23-4)となっている。また、福岡市の吉武遺跡群第19次調査では8世紀～11世紀の溝から出土している(表4-5、図23-5)。出土例が非常に少ないが、3例とも古墳時代後期以降の出土となっている。勾玉は碧玉などの石製、ガラス製であることが多い、金属製勾玉は古墳時代中期以降出土することがあるが空玉であり、铸造品である本例とは製作技法が全く異なる。

青銅製勾玉が出土したSX001は弥生時代終末期、古墳時代終末期～古代、中世の遺物を含んでいる。南側で行われた大塚遺跡第4次調査では土製の勾玉が溝から出土しているが、時期が弥生時代終末期となっており、先に挙げた3例とも古墳時代後期以降とされ弥生時代終末期ではないと思われる。吉武遺跡群で出土した青銅製勾玉は「隅丸角錐棒を曲げて造作したような形態」となって

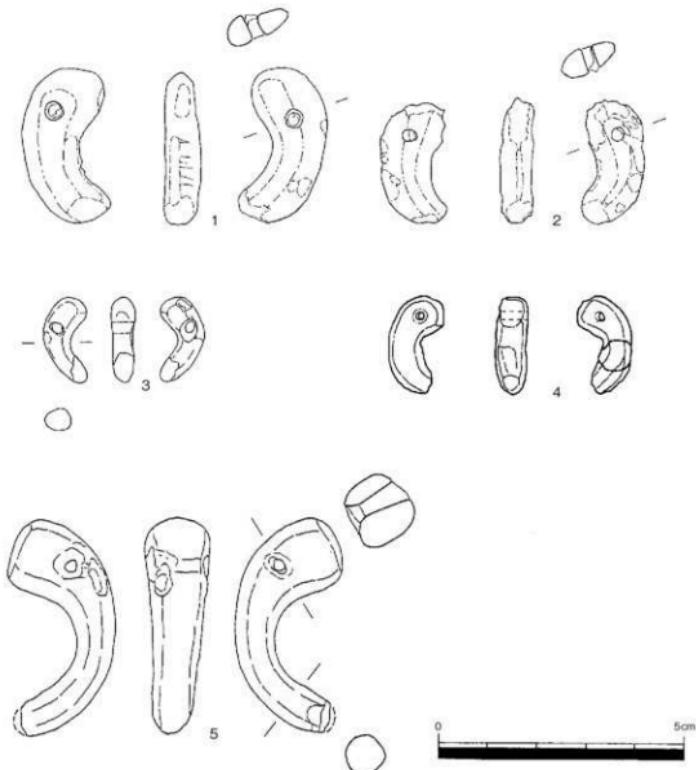
おり、大塚遺跡第21次調査で出土した2つの青銅製勾玉とは違った形態になっている。形態としては下大谷古墳群1号墳第1埋葬施設から出土したものと類似している。以上から推測すると、時期は古墳時代終末期～古代頃が妥当ではないかと考えられる。

【参考文献】

- ①「松原10号墳」鳥取市文化財団編 鳥取市文化財団 2013
- ②「下大谷古墳群・印路古墳群C・印路台状墓」兵庫県文化財調査報告 第106冊 兵庫県教育委員会 1992
- ③「吉武遺跡群XIX」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第九六五集 福岡市教育委員会 2007

	遺跡名	図	時期	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	紐孔(mm)	重量(g)	色調	残存状況	文献	
1	大塚遺跡21次 SX001	第23図1	古墳時代 終末期～古代	3.2	0.7～0.8	0.6	3～4	13.01	淡緑色	一部欠損	本報告	
2	大塚遺跡21次 SX001	第23図2	古墳時代 終末期～古代	2.6	0.6～0.7	0.6	2～3	7.67	青緑色	表面欠損	本報告	
3	松原10号墳 第1埋葬施設	第23図3	6世紀前半	1.716	0.63	0.5	1.63 ～2.39	1.606	青緑色	一部欠損	①	
4	下大谷古墳群1号墳 第1埋葬施設	第23図4	6世紀中頃	2.0	0.6	0.6	1.5		青緑色	一部欠損	②	
5	吉武遺跡群9次 SD11	第23図5	9世紀前半	4.61	0.7～0.8	0.7～0.8		2	36	青緑色	一部欠損	③

第4表 青銅製勾玉一覧表



第23図 青銅製勾玉集成図（1/1）

VI. 第22次調査の記録

1. 概要

ここで報告する大塚遺跡第22次調査区は、西区今宿町333-2、334-3、334-5、334-6、334-7に所在する。調査前の現況は、標高約9.5～9.9mを測る家屋解体後の平地で、北側および東側には旧家屋に伴うコンクリート製の擁壁が巡る。調査地点は、遺跡の北東側に位置し、周辺では区画整理事業等に伴う多くの調査が実施されている（第2・3図）。まず本調査区の東側は、第7次調査の1・2区の一部と重複しており（第24図）、当時の遺構の掘り方が一部残っていた。また、西側は第16次調査区と隣接し、北側は約5mの空閑を挟み、第17次調査が実施されている。東側には第9次調査区が数地点あり、本遺跡の東側に位置する今宿五郎江遺跡とを分かつ谷地形が北側から開析することが判明している。さらに、南西側約30mには6世紀前半代の墳丘全長約64mを測る前方後円墳、大塚古墳（国史跡 今宿古墳群）が位置する。

「II. 遺跡の立地と環境」でも触れたように本遺跡は、北側に舌状に延びる低位段丘を主体に立地し、本調査区もその丘陵上にある。調査区の土層（第25図）は、上層に宅地造成時の客土（2層）や仮設道路敷設の際のバラス（1層）があり、薄い堆積層を挟んで地山となるが、東側の一部には、3～5層の堆積が残る。また、遺構面は西側から東側に緩く傾斜している。

遺構面の標高は、調査区南西端が最も高く標高9.6m、南東端で最も低く8.7mを測る。本調査区の西側から第16次調査区の東端部にかけては遺構面の標高が高く、遺構密度が薄いことから、段丘の尾根線に相当するものと考えられる。また、この南側延長上には大塚古墳の後円部が占地する。以上から、本調査区の大半は、段丘の東側緩斜面に立地し、東端部は尾根線に近いものと推定される。また、遺構面は段丘の基盤である花崗岩風化層で、赤褐色粘性土と砂礫を含む黄褐色土が互層になっているため、調査区内で一定ではない。

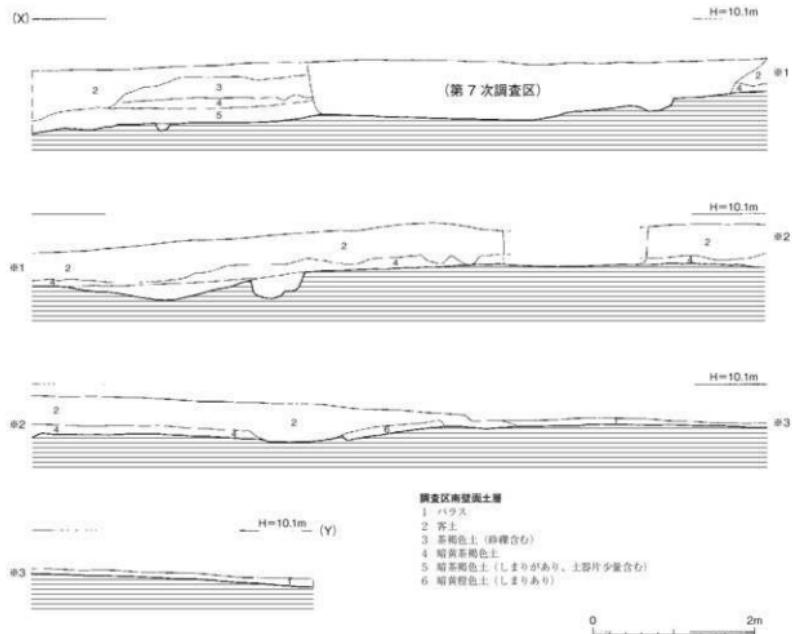
遺構検出は上述の遺構面上までを重機で剥ぎ取って実施した。調査の結果、弥生時代の溝1条、中世後半期の掘立柱建物や土坑、溝、ピット等を確認できた。出土遺物量はコンテナケースにして5箱で、細片が多い。また、第7次調査と重複したことにより、両調査区に跨る掘立柱建物が確認できた。

発掘調査は、平成24（2012）年9月5日に重機による表土剥ぎ取りから開始した。その作業と併行しながら、発掘器材やリース器材の搬入や遺構面の養生を行った。重機作業終了後には、日本測地系によるトラバース杭の設定を実施し、平板測量を実施しながら、調査区東側より遺構検出を開始した。順次、検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ等の作業を進めたが、緊急的に10月1日から別遺跡の調査に着手する必要があったため、9月28日に現場を養生の上、一旦調査を中断した。別遺跡の調査終了後、11月5日に調査を再開し、継続して諸作業を進めた。遺構の掘削作業がほぼ終了した12月11日にラジコンヘリコプターによる全体写真の撮影を行い、その後、残る図化作業や個別遺構写真撮影、片付け等を終えた12月17日に第22次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、600.0m²であったが、既設の車庫等の施設部分を調査から除外したため、実際の調査面積は580.2m²であった。調査時の遺構番号は、001から3桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。

2. 遺構と遺物

以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における日



第25図 第22次調査区南壁面上土層実測図（1/60）

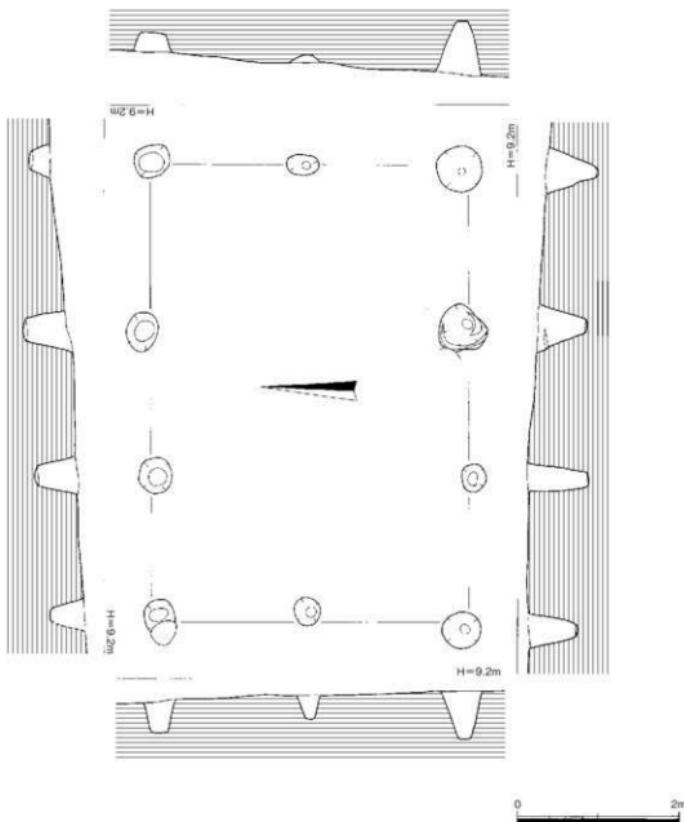
本測地系による10m単位の平面座標を基準とした英字（西から東にA～D）と数字（北から南に1～3）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第24図参照）。

1) 掘立柱建物 (SB)

調査区東側の緩斜面上に計5棟の建物を復元することができた。いずれも覆土は暗茶褐色土を主体とする。なお、うち2棟は前述の第7次調査と重なって検出したものである。以下の建物主軸方位は座標北からの偏差である。

SB006 (第26図) 調査区北東のB-1で確認した 2×3 間の東西棟の建物である。大半は第7次調査2区においてSB10として報告されていたもので、今回の調査では、北西の隅柱と西側梁間の間柱を検出した。主軸方位はN-87°-Eで、桁行全長5.6m、柱間1.8～1.9m、梁間全長3.8m、柱間1.9mを測る。柱穴は円形を主体とし、径0.3～0.5m、深さ0.5m前後を測るが、梁間の間柱は浅い。出土遺物は今回の調査では、北西隅柱から土師器片が1点出土したのみであるが、第7次調査では土師器壺や土師質擂鉢が出土している。

SB007 (第27図) B-C-2に位置する 2×2 間以上の東西棟と推測される建物で、東側は攪乱によって失われ、西側の柱穴はSD002に切られている。主軸方位は、N-67°-Eを測り、検出できた西側梁間の全長は3.0m、柱間は1.5m、桁行の柱間は2.5mである。柱穴は楕円形プランを呈し、

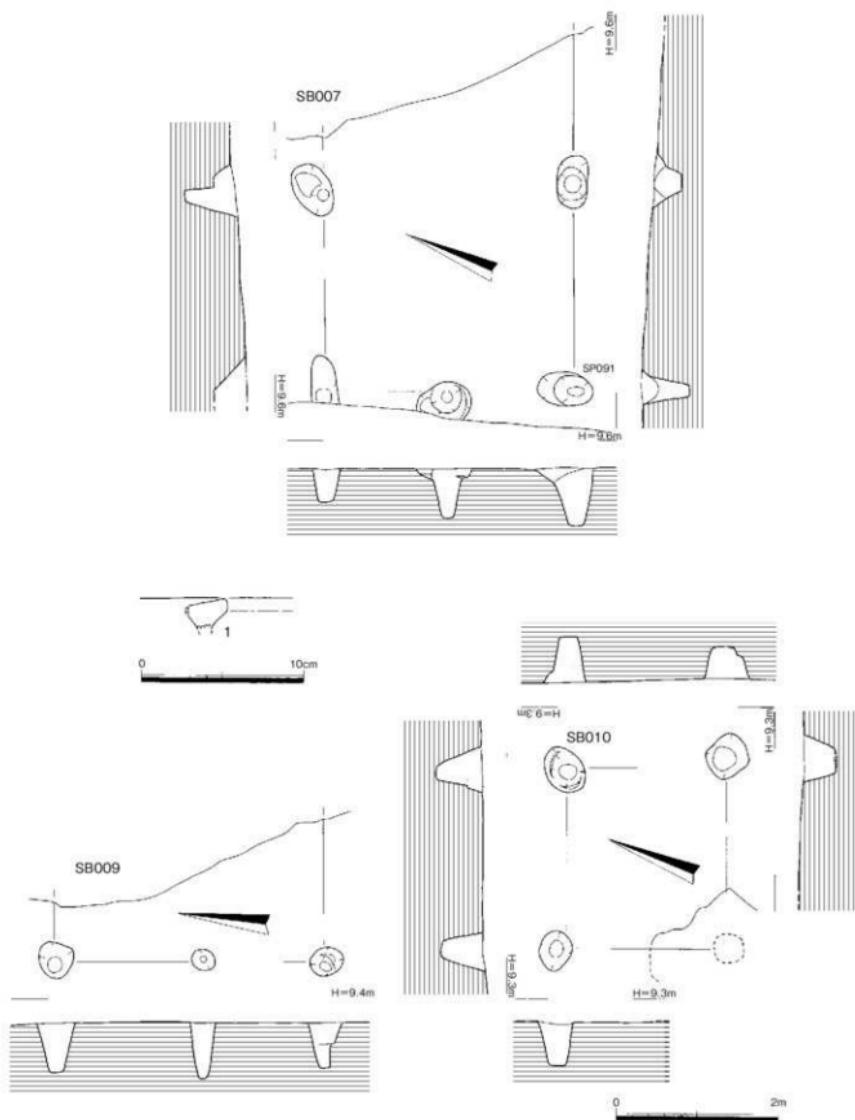


第26図 SB006実測図（1/60）

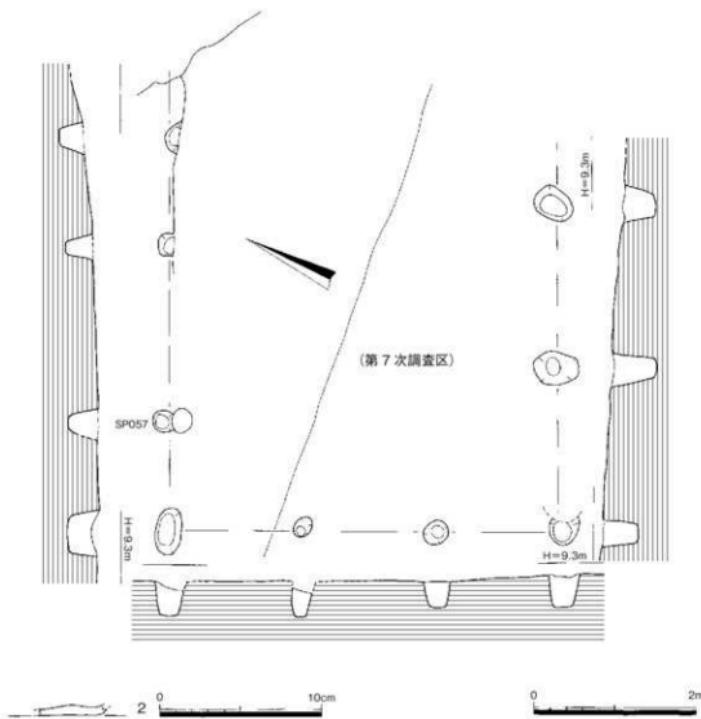
長径0.6m前後、深さ0.3~0.7mを測る。

出土遺物（第27図1）SP091出土の土師質鍋の細片で、口縁部は短い逆「L」字状を呈し、端部外面には煤が付着する。他に土師器の細片が出土している。

SB008（第28図）調査区南東端のC-3で検出した。南側の一部は第7次調査1区においてSB07として報告されていたもので、今回の調査ではその北側を確認したが、東側は擾乱によって失われる。また、北側の桁柱の多くはSD002に、第7次調査では西側梁間の柱穴の1つがSD001（第7次SD03）に切られる。これらは、主軸方位をN-65°-Eとする3×4間以上の東西棟の建物に復元することができ、西側の梁間全長4.8m、各柱間1.6mを測る。また、桁方向の柱間は南側では約2mであるが、北側では1.3、2.1mを測り、不定である。柱穴は円形もしくは楕円形で、径、



第27図 SB007・009・010実測図（1/60）およびSB007出土遺物実測図（1/3）



第28図 SB008実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/3）

深さ共に0.3～0.5mである。

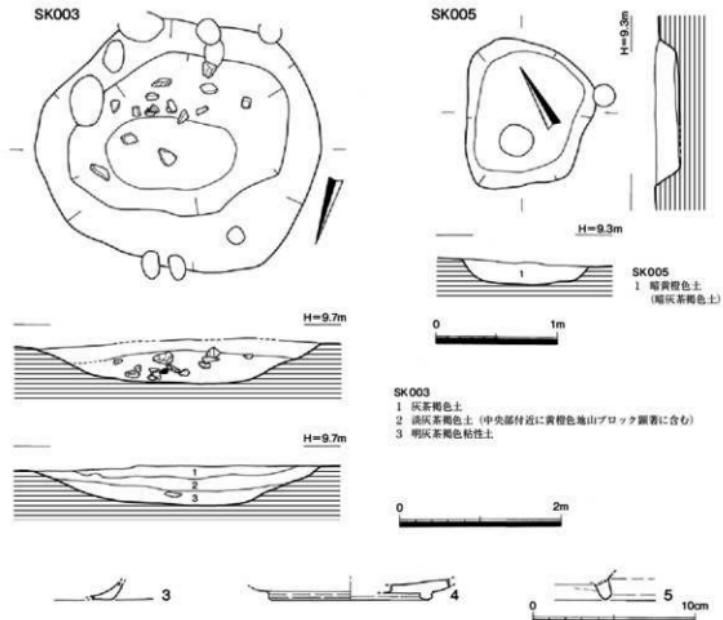
出土遺物（第28図2）SP057から出土した土師器の小皿の底部片である。風化するが、外底部には回転糸切りの痕跡が残る。他にも土師器が出土しているが、いずれも細片である。

SB009（第27図）B-2で検出した直線に並ぶ2間の柱列が北側のSB006の梁間と類似した方位を有することから、この柱列はSB006同様の東西棟の西側梁間であると推定した。東側の大半の柱穴は擾乱により欠失しており、建物規模は不明である。主軸方位はN-84°-Eで、円形の柱穴の径は0.25～0.5m、深さは0.6～0.7mを測る。出土遺物には土師器等の細片が少量ある。

SB010（第27図）C-2・3に位置する1×1間の建物で、南西の隅柱は擾乱によって失われている。柱間は南北2.0m、東西が2.2mを測り、やや長い。主軸方位はN-69°-Eである。柱穴はやや隅丸気味で、径約0.5m、深さ0.4～0.6mを測る。出土遺物は少量の土師器細片のみである。

2) 土坑 (SK)

SK003（第29図）調査区の中央、B-2で確認したやや不整な椭円形プランの土坑で、長径3.5m、短径3.0mを測る。断面は皿形を呈し、深さ0.5mを測る。1・2層と3層では土質や色調が明瞭に



第29図 SK003・005実測図（003は1/60、005は1/40）およびSK003出土遺物実測図（1/3）

異なり、3層は粘性が強い。また、南側の覆土を主体に拳大からやや大きな花崗岩を主体とする角礫が散在し、被熱による黒変が数個に認められた。

出土遺物（第29図3～5）いずれも上層出土で、3は土師器小皿の細片、4は混入と考えられる古代の須恵器壺cである。5は明代の龍泉窯系青磁と思われる碗の高台片で、端部の外面を削る。高台内的一部分まで釉が掛かる。他に土師質土器や銅錢の細片等が出土している。

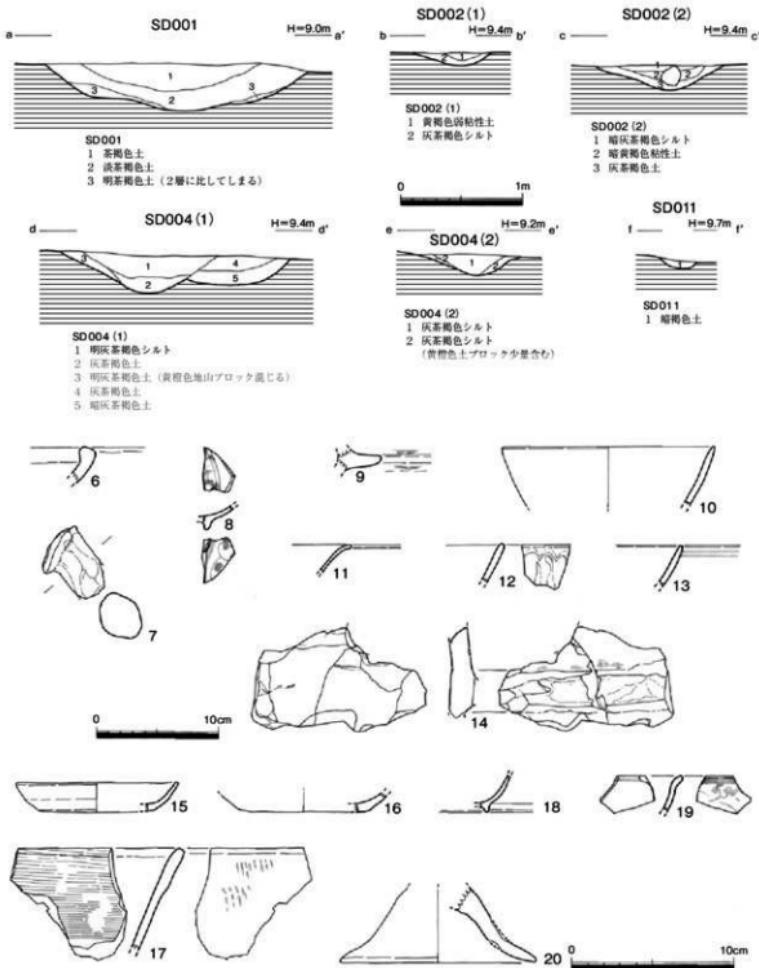
SK005（第29図）B-1で検出した不整な隅丸方形の土坑である。長さ1.2m、幅1.1m、深さ0.15mを測る。断面は逆台形を呈し、覆土はブロックを含むものの暗黄褐色土の單一層であった。出土遺物は数点の土師器細片のみである。

3) 溝 (SD)

弥生時代後期と考えられるSD011を除き、中世後半の区画溝と推定される。

SD001（第24・30図）調査区の南東端のC-D-3に位置する幅2.1mの溝で、北東側は搅乱によって切られる。また、南西側は第7次1区でSD03として報告されている溝に続く。a-a'の土層の西側で緩く段落ちして、深さ0.4mを測る。

出土遺物（第30図6～8）6は土師質鍋もしくは擂鉢の口縁部片で、端部が内側に突出する。土師質の7は脚部もしくは把手であろう。8は明代の染付碗で、豊付きの釉を削って露胎とする。他に瓦質土器等の細片が出土している。



第30図 SD001・002・004・011実測図（1/40）および出土遺物実測図（14は1/4、他は1/3）

SD002（第24・30図） 調査区南東部のB-C - 2・3で検出した「T」字状に分岐する溝で、SD001に並行する。東西方向は端部が調査区外に延びるが、北側は端部を確認した。分岐のやや東側では掌大の花崗岩の集石が認められた。幅0.5～1.1m、深さ0.1～0.2mを測る。南北方向では南側が、東西方向では東側が低くなる。

出土遺物（第30図9～14）9は瓦質土器の羽釜の鉢部で、刷毛目調整を施す。10・11は白磁で、10はややオリーブがかった釉が掛かる碗、11は端反りの皿である。12は線描蓮弁文を有する明代龍泉窯系青磁の碗である。13は明代染付碗で、口縁部外面に2条の圈線が巡る。14は混入の円筒埴輪で、大半のタガが剥落する。僅かに円形透かしの痕跡が認められる。他に土師器の細片が少量出土した。

SD004（第24・30図）調査区北端で確認した東西方向の溝で、東側は端部が南側に折れる第7次調査2区SD06に、西側は直線的に延びる第16次調査SD031に統一され、その総延長は約85m以上を測る。本調査区では、搅乱や削平により遺存状況は良好ではないが、断面は緩い「V」字形を呈し、一部では掘り直し（d-d' 土層）が確認できた。底面は東側に傾斜する。

出土遺物（第30図15～19）15・16は回転糸切り底の土師器壺で、15の復元口径は10.0cmを測る。17は土質鍋で、外面の口縁部と体部の境界に鈍い段を有する。外面には煤が付着する。18は白磁碗の高台部の細片で、端部を釉剥離する。19は端反りの明代染付の碗もしくは皿である。

SD011（第24・30図）A-2の調査区西端で一部を検出したが、西側は第16次調査SD001に繋がり、周溝状をなす。幅0.3m、深さ0.1mを測り、断面は逆台形を呈する。覆土は調査区内の遺構の多くが灰茶褐色系を呈するとの異なり、暗褐色であった。

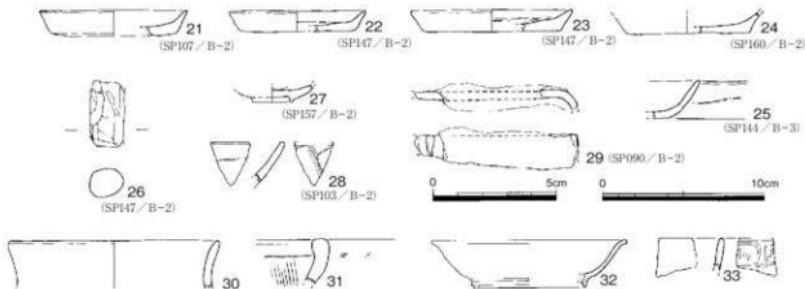
出土遺物（第30図20）弥生土器脚付鉢の脚部と思われ、鋸部が開く。器面が荒れており、胎土には砂粒が目立つ。後期後半から終末期であろう。他に混入の白磁等が少量ある。

4) その他の遺物

最後にピット（SP）、遺構検出時の出土遺物について報告を行う。

ピット（第31図21～29）21～25は土師器小皿で、22・23のみ外底部に回転糸切り痕が残る。26は瓦質で、足鍋の脚部であろう。27は白磁の小碗である。見込みと疊付の釉は削り取る。28は明代龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面に丸彫りによる蓮弁文を施す。29は鋸化の進む鉄製品で、刀子であろうか。片側端部が緩く折れる。なお、以上の遺物の出土遺構は、遺物番号の下にグリッド名と共に記載している。22・23・26は同一ピット出土である。

遺構検出時（第15図30～33）遺構検出作業時に採集した遺物である。30は土師器の直口壺、31は瓦質土器の擂鉢で、内面に鈍く突出する。32は端反りの白磁皿で、高台端部を削り、露胎とする。33は明代龍泉窯系青磁碗の口縁部片で、外面にヘラ書きの雷文を有する。



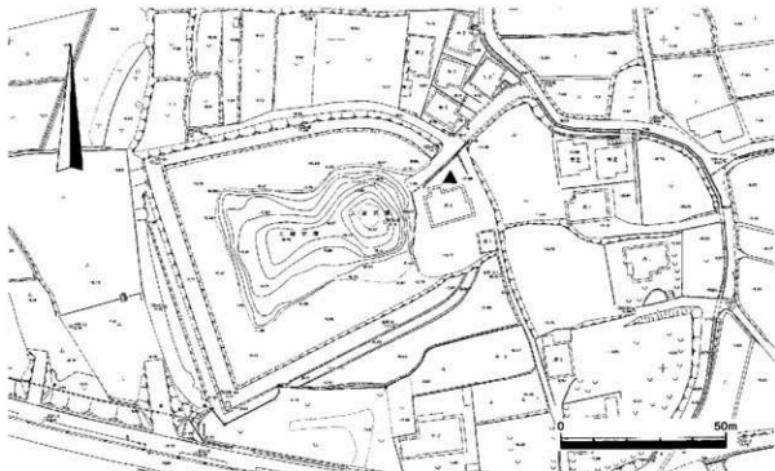
第31図 ピットおよび遺構検出時出土遺物実測図（29は1/2、他は1/3）

付編

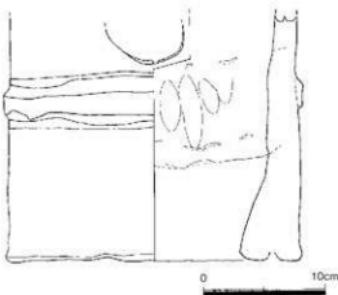
大塚古墳出土の埴輪について

本事業地内に所在する「国史跡 今宿古墳群」の一つである大塚古墳では、区画整理事業の実施にあたり史跡地内にある家屋を撤去するため、平成23年12月22日付で、地権者より現状変更許可申請書が提出された。解体工事は平成24年2月17日付で許可を受けた後、同年10月29日より開始した。

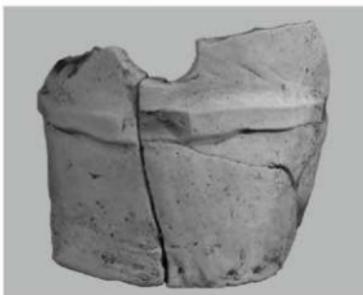
ここでは、文化財保護課職員による工事立会を行った際に第32図の▲で出土した円筒埴輪片（第33図、写真）を報告する。なお、資料は搅乱土中に含まれており、原位置をとどめてはいない。最下段付近の破片で約1/2が残り、透かしは円形である。内外面共に黄褐色で、外面は風化が激しくハケ調整は見られない、内面はナデ調整である。粘土帯を巻いて基底部を成形する。その他、土師器の楕が出土したが、細片により図化していない。



第32図 大塚古墳円筒埴輪出土位置図（1/1,500）



第33図 大塚古墳出土円筒埴輪実測図（1/4）



大塚古墳出土円筒埴輪写真

図 版



第22次調査作業風景

第19次調査



(1) 第19次調査区全景（1）(西から)



(2) 第19次調査区全景（2）(西から)

第19次調査



(1) SB018 (東から)



(2) SB019 (北から)



(3) SK013 (北東から)



(4) SK013土層 (北西から)



(5) SK014 (北から)



(6) SK015 (東から)

第19次調査



(1) SK 015 土層（南から）



(2) SD 001（北西から）



(3) SD 001 a - a' 土層（北西から）



(4) SD 002（北西から）



(5) SD 002 b - b' 土層（北から）



(6) SD 003 c - c' 土層（北から）

図版4

第19次調査



(1) SD004 (東から)



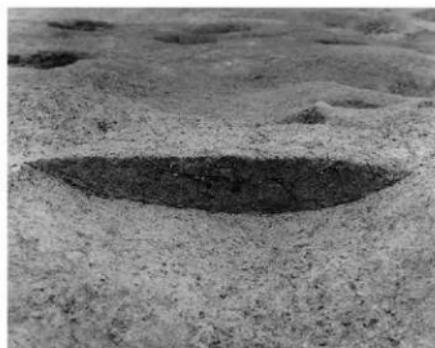
(2) SD004 d - d' 土層 (北東から)



(3) SD005・006 (南西から)



(4) SD005・006 e - e' 土層 (北から)



(5) SD007 g - g' 土層 (東から)



(6) SD009・010 (東から)

第19次調査



(1) SD009・010 j - j' 土層（西から）



(2) SD009 h - h' 土層（東から）



(3) SD010 m - m' 土層（東から）



(4) SD016 (東から)



(5) SD016 n - n' 土層（東から）



(6) SD017 p - p' 土層（北から）

図版6

第19次調査



第19次調査出土遺物

第20次調査



第20次調査区全景（上空から）

図版8

第20次調査



(1) SB 082 (北から)



(2) SK 036 (南から)



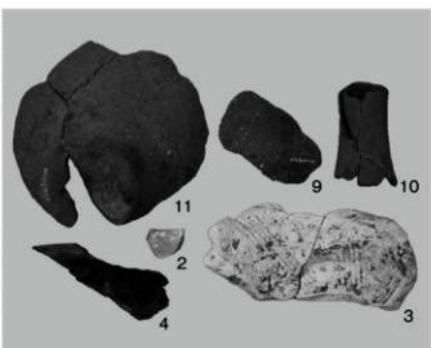
(3) SK 038 (東から)



(4) SD 001 - 002 (南から)



(5) SR 037 (西から)



(6) 第20次調査出土遺物

第21次調査



(1) 第21次調査区全景（上空から）



(2) 第21次調査区東壁面北半部土層
(西から)



(3) 第21次調査区東壁面南半部土層
(西から)

図版 10

第21次調査



(1) SC 008 (北から)



(2) SC 008 土層 (西から)



(3) SC 008 出土高坏 (南から)



(4) SC 008 出土碗 (南から)



(5) SK 034 (西から)



(6) SK 034 土層 (西から)

第21次調査



(1) SD 033(西から)



(2) SD 033土層(西から)



(3) SX 001勾玉出土状況(1)(北から)

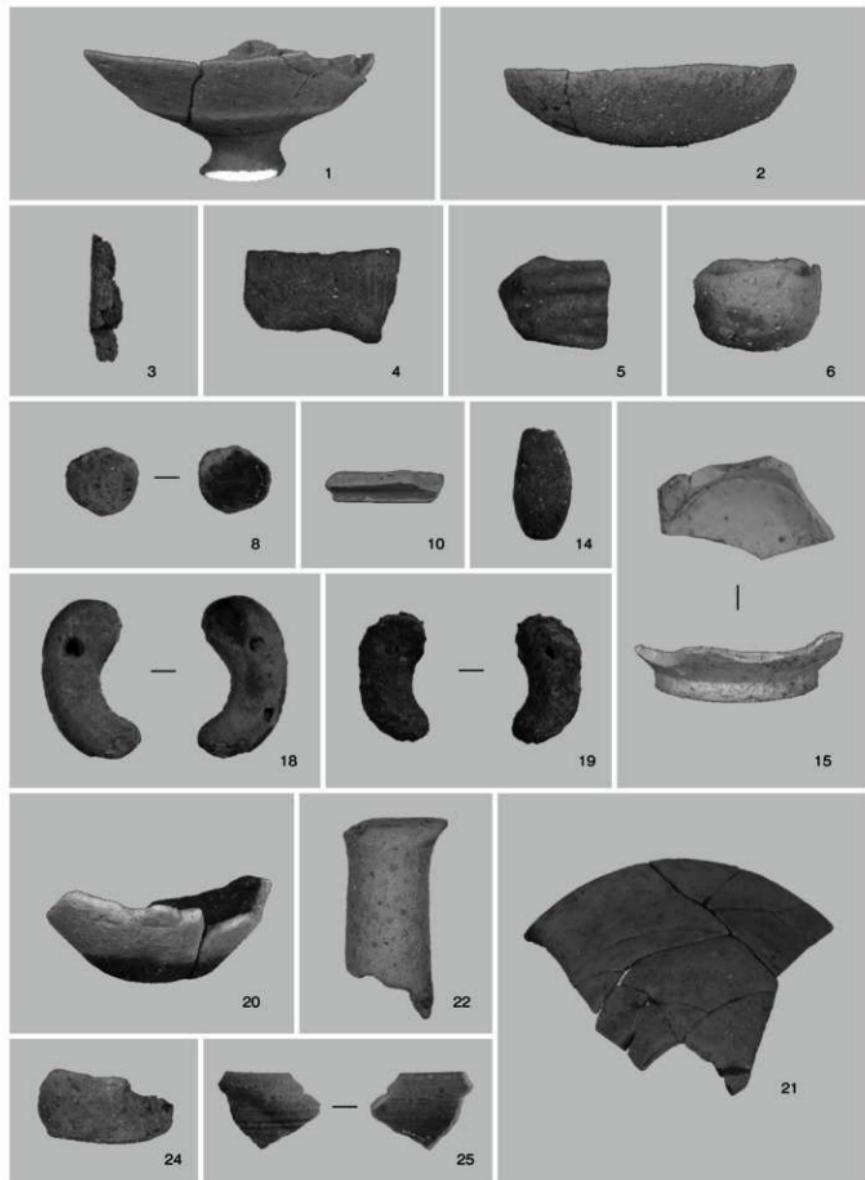


(4) SX 001勾玉出土状況(2)(南から)



(5) SX 001勾玉出土状況(3)(北から)

第21次調査



第21次調査出土遺物

第22次調査



(1) 第22次調査区全景 (1) (上空から)

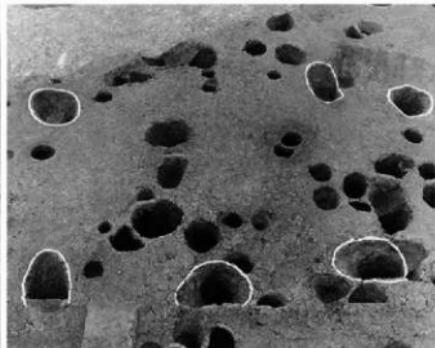
*上が北



(2) 第22次調査区全景 (南上空から)



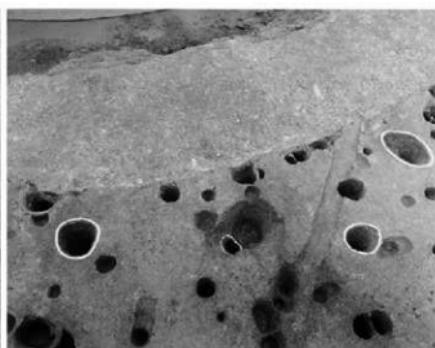
(1) SB006 (南から)



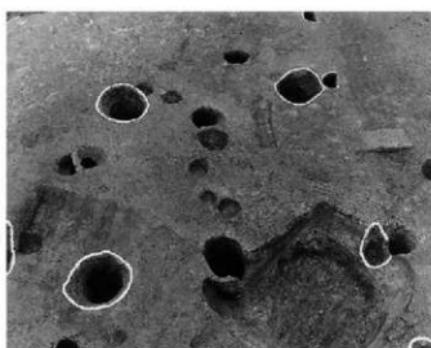
(2) SB007 (西から)



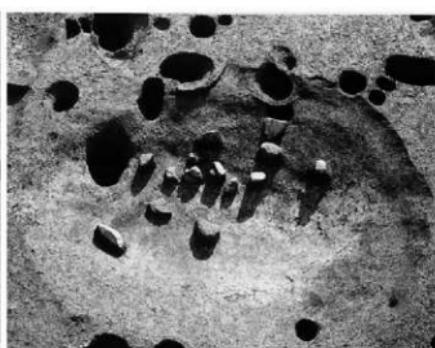
(3) SB008 (南から)



(4) SB009 (西から)

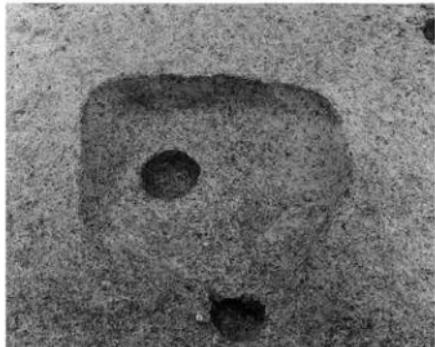


(5) SB010 (西から)



(6) SK003 (北から)

第22次調査



(1) SK005 (南東から)



(2) SD001 (西から)



(3) SD002 c - c' 土層 (西から)



(4) SD004 (西から)

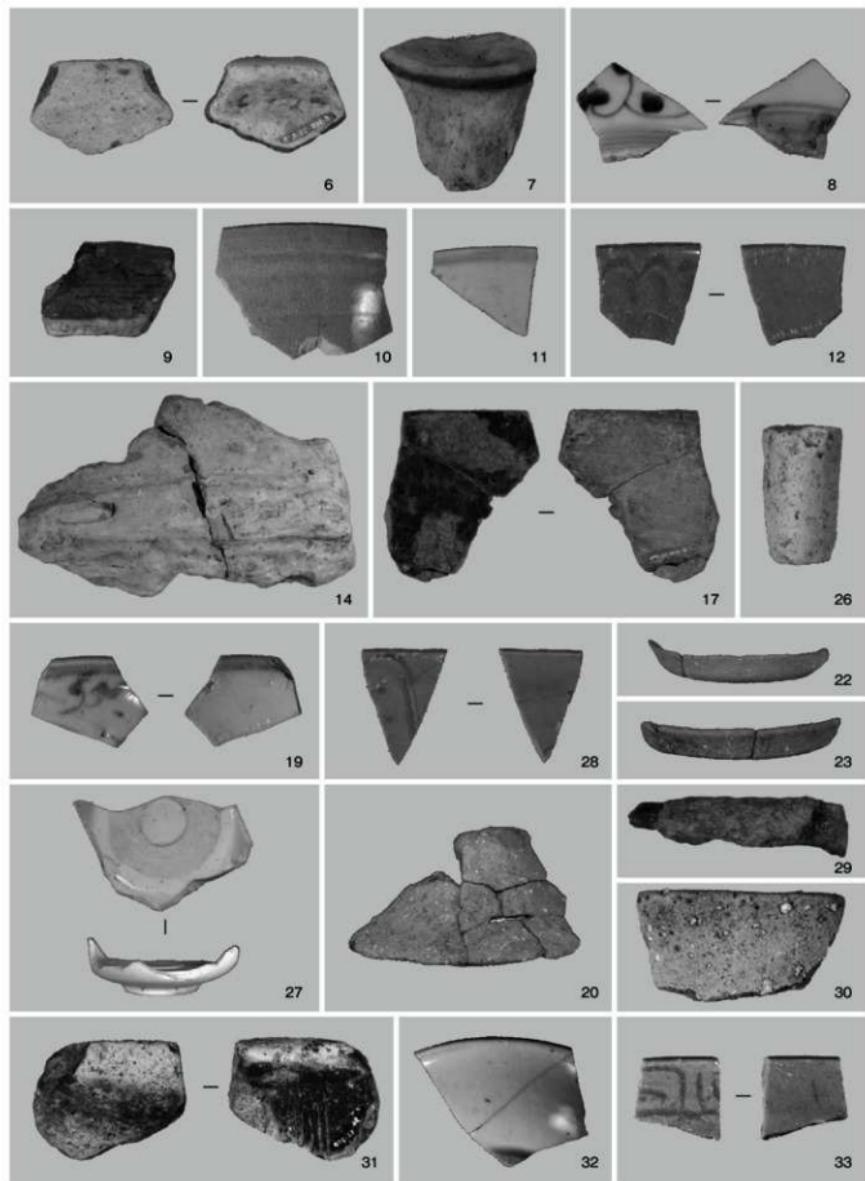


(5) SD004 d - d' 土層 (東から)



(6) SD011 (南東から)

第22次調査



報 告 書 抄 錄

おおつかいせき 7

— 大塚遺跡第19・20・21・22次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1223集

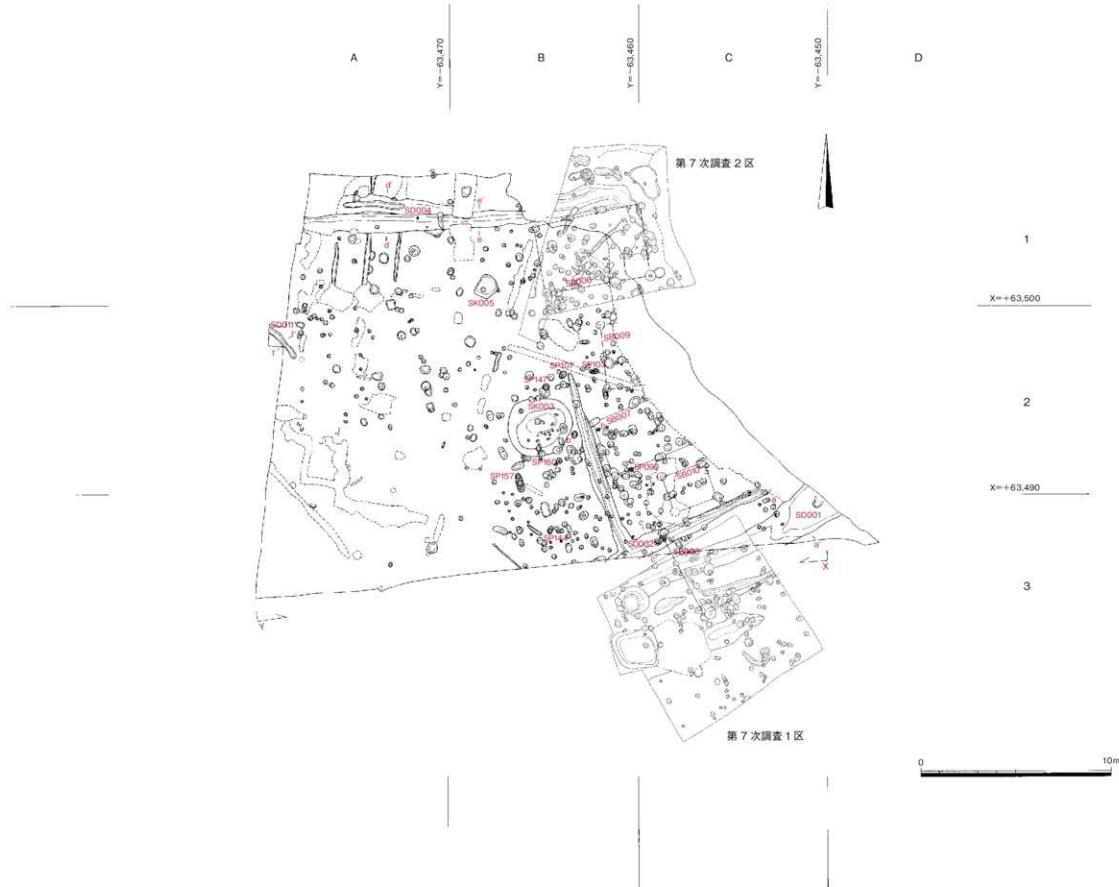
2014(平成26)年3月24日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092) 711-4667

印刷 株式会社 親和プロセス
福岡市南区塙原1丁目4番4号
(092) 552-2402



第5図 第19次調査区全体図（1 / 200）



第24図 第22次調査区全体図（1 / 200）